
復讐 ツミヲツグナエ

零【zero】

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

復讐 シミヨツグナエ

【Zコード】

Z5945V

【作者名】

零【zero】

【あらすじ】

ある日、妹が死んだ。俺のたった一人の家族だった妹が殺された。俺は、アイツを許さない。たとえこの体が、心が。憎しみに蝕まれ、悲しみに朽ち果てても

俺は復讐を誓う。法で裁けないのなら、この俺が、裁いてやる。

第一章　『いってきます』【1】

真っ白なコリの花が飾られた、華やかだけど物悲しい。そんな小さな壇に、写真が飾られていた。

写真の中の女の子は、太陽のようなひまわりをバックに、写真を撮る兄へ無邪気な、それこそ太陽のよつたな笑顔を見せていた。

写真。それは、二度と戻れない一瞬を切り取った、大切なモノ。親にそう言われてから、俺は大切な写真もそうでもない写真も、全てをアルバムに閉じ保管していた。

それが、こんな形で役立つことになるなんて…。俺は一人、自嘲気味に笑う。

あの写真は、去年、近所の花畠に連れて行ったときのやつだったか。そのときのことは、昨日のことのように覚えている。たくさんひまわりに囲まれ、はしゃいでいた…。帰るときには、すっかり疲れきって、俺に背負っていた。眠気を堪え、頭を力ク力クとさせながら、『来年も来ようね?』と言っていた。俺は『来年も再来年も、お前に反抗期がくるまで連れてきてやるよ』そつとつて、微笑んだ。

「今年は連れて行ってやれなくて、ごめん」

俺は写真に向かって話す。そう呴いただけなのに鼻の奥がツンとして、もう流しつくしたはずの涙が流れた。

「拓哉君。瑠佳ちゃんのこと、なんていつたらいいのか…。困ったことがあつたら、何でも言ってね?できるだけ、力になるから」「はい。ありがとうございます」

隣の部屋のおばさんに涙を堪えてそう答えると、俺は静かに椅子

に腰掛けた。

遠くのほうで、話している声が聞こえる。

「まだ高校生なのにな…」

「あんなにいい子だつたのに。なんて酷い…」

「小さい頃に親に捨てられて…。本当に氣の毒…」

同情か、嘲笑か。どっちだつて、対して変わらないような気がする。死んでから氣を使われたつてな。

あの写真は、妹の遺影。今年小学校に入学したばかりの、年の離れた俺の妹。妹は俺にとつてただ一人の家族だつた。

母さんが瑠佳を妊娠してすぐ、父さんが死んだ。母さんは瑠佳を産んだけど、三年後、まだ中学生だつた俺と三歳の瑠佳を置いて家を出た。俺が朝起きると、涙で滲んだ書置きの手紙と、今月の生活費と書かれた封筒が置いてあつた。手紙には『ごめん』とだけ書かれていた。

俺はそれだけで、全てを理解した。

それから俺は、母さんからの仕送りや、バイトで稼いだ金で何とか生活してきた。母さんを恨んだ事は無い。こんなことをいうのも変だけど、あの状態の母さんじやあ、俺たちを捨てたことは仕方なかつたとしかいえない。

母さんは、父さんのことも、俺たちのことも忘れて、幸せになるべきだつたんだ。

だから、仕方ない。ずっと、自分にそう言い聞かせてきた。

だつて文句を言う相手も、反発する相手もいないんだ。毎日を生きるのに精いっぱいで、自分を捨てた親の事なんかいちいち考えていられる時間なんかない。

もういい。自分の娘の葬式にも出ない親がどこにいる。…嗚呼、ここにいたか。まあ、そもそも居場所が分かんないんだから、教え

てもやれないが。

でも、嗚呼。瑠佳と過ごす日々は毎日が楽しかった。もしかしたら、寂しい思いもさせたかもしれない。悲しい思いもさせたかもしれない。あの子がどれだけ我慢したか分からない。欲しい物を買ってあげられなかつたし、おいしい物を作つてあげられなかつた。でも、瑠佳はいつも『お兄ちゃん』と呼んで、笑つてくれた。ワガママも言わない、聞き分けのよい、いい子だつた。たとえシスコンといわれたつて構わない。そんなこと、勝手に言つていたらしい。俺にとつて瑠佳がすべてで、瑠佳にとつて俺が全てだつただらうから。

どうして俺たち兄妹にばかり、こんなに不幸が訪れるのだろう。不幸が訪れるのなら、俺に来ればよかつたのに……。

「なんで……こんなことに……」

今からいちよつと一週間前。瑠佳の七歳の誕生日だった。

+++++

『瑠佳……遅刻だ遅刻……』

そう言つて、自分の準備もそこそこ妹の髪を梳かしてやる。

『これでよし』

ランドセルを背負わせ、黄色い帽子をかぶせる。

『ねえ、お兄ちゃん、今日が何の日か……覚えてる?』

『んー? 何かあつたかなあ?』

『お兄ちゃん……』

『うそうそ。冗談だつて。可愛い妹の誕生日なんか、忘れるわけないだろ？』

そう言って、瑠佳の頭を撫でてやつた。フワフワの髪が手の平に心地よかつた。

『えへへ。今日ね、おひなにお友達よんでいい？』

『おう。いいだ。誰がくるんだ？』

『カナちゃんど、わつきちゃんど…あと…くん。』

『んー？なに君だつてー？』

『ちー、ちがー…。違うもん！…』

そう言つと、瑠佳は林檎のよつに真つ赤になつた。

『わうか。ついに瑠佳にも好きな人が…。でもな、気に食わない奴だったら、兄ちゃん瑠佳をお嫁にはあげません！…』

『お兄ちゃん…？』

『ははは。ほひ、早く学校行つて来い』

『うそつ。いつきます』

『いつてひつしゃい、瑠佳。気をつかひな

『うそつ。いつ…』

駆けていく瑠佳の後ろ姿が、朝日こまぶしかつた。いつもどおり

の、いや、小学校に入つて初めての誕生日を迎えた、朝。白いフリルのワンピースが風に揺れて…。

+++++

あの日は、とびっきり幸せな日になるはずだつた。誕生日プレゼントに、瑠佳が欲しがつていたくまのぬいぐるみも内緒で準備していたし、ケーキもできるだけ豪華なやつを買つっていた。

瑠佳の友達を呼んで、盛大に祝つてやろうと思つていた。学校に行く前に瑠佳の友達の親御さんにも連絡して、どうにか頼み込んだ。

でも、瑠佳は帰つてこなかつた。

どんなに待つても、帰つてくることはなかつた。

そのとき鳴り響いた、一本の電話。

瑠佳の『いつきますーー』といつも元気な声が、まだ耳の奥に残つていた。

「雨が…」

初めは小さかった雨音が、次第に大きく、激しくなっていく。そうだった。あの日も、こんなふうに雨が降つていて…。

+++++

「瑠佳、遅いな」

俺は準備の手を止め時計を見た。時刻は4時過ぎ。瑠佳はいつも遅くても3時半には帰つている。雨も本降りになってきたし、過保護かもしれないけど迎えにいってやるか。と俺は立ち上がった。

部屋の飾りつけはよく分からないので手付かずだが、テーブルの上には誕生日用の蠟燭が立つたケーキと、俺の自信作の料理が並んでいた。瑠佳の友達の親も作つて持つて来てくれるらしいから、そんなに多くは無い。くまのぬいぐるみも、赤いリボンを纏つてちゃんとスタンバイしている。少しむず痒い気持ちになりながらも、俺はそのくまをそつと抱きかかえた。

そのとき、一本の電話が鳴つた。俺はくまを小脇に挟み、受話器をとる。

「もしもし。楠木です」

『警察です。君は、楠木拓哉君?』

『はい。拓哉は俺ですけど。…警察がなにか用ですか?』

『その様子じゃあ、まだ、知らないんだね。落ち着いて聞いて欲しい。実は、瑠佳ちゃんが…』

「は…？」

その続きを聞いた途端、これは性質の悪い冗談だと思った。とても現実に起きたことだとは信じられなかつた。信じたくないなかつた。でも、心のどこかでこれは実際に起こつたことなんだと、認識している自分がいる。

「嘘だ。嘘だ！…瑠佳は、今日が誕生日で、だから…！」

『…君が取り乱すのも分かる。とりあえず、署まで…』

その続きは、聞き取れなかつた。俺の震える右手が、受話器を床に落としたのだ。とても、掴んではいられなかつた。受話器から聞こえてくる警察の声が、いやに遠く聞こえる。

次の瞬間俺は、くまを持ったまま雨の中へ飛び込んでいた。傘なんか差していない場合じやない。俺は道行く人々を蹴散らし、一心不乱に走つた。冷たい雨が、俺を濡らして行く…。

早く行つて、この目で確かめるんだ。冗談だつて言つて笑う、瑠佳を見るんだ。そして、家につれて帰つて、誕生日を祝つてやつて、その後でキツく叱るんだ。

だから、絶対に嘘に決まつてゐる。そんな、瑠佳が…ルカガコロサレタナンテ…。

+++++

警察からこの詳細を聞き、車に乗せられて数十分、俺は大きな白い建物の前で降ろされた。

「病院…？」

そこからどうやって瑠佳がいるという、そのへやの前までいったのかは覚えていない。俺は頭の中が混乱していて、とてもそれどころじゃなかつたのかもしれない。

俺はドアを勢いよく開け、瑠佳がいるという部屋の中に飛び込んだ。そこには瑠佳の姿は無かつた。あつたのは、白い布を掛けられた、瑠佳と同じ大きさぐらいの、人型の何か。

そして、何も考えずにそれをめくつた。手先に僅かな祈りを託して。微かに指が震えていたような気もする。そこにいたのは……

「る……か……」

瑠佳はそこにいた。朝、学校へ出かけて行つたときと同じ、白いフリルのワンピースを着て。でも、何かが決定的に違う。

「はははは。おい、瑠佳。兄ちゃん騙されねえぞ。起きる。家に帰る」

「いやら揺すつても瑠佳は起きない。それどころか、その体は完全に体温を失つていて……」

「もうおしまい。もう十分びっくりしたから。警察の人に迷惑かけちゃ駄目だつて言つたろ？兄ちゃん、おいしいのいっぱい作つたんだ。早く帰つて食べよう。みんなで誕生日パーティー……やるんだろ？」

瑠佳は、起きない。俺は瑠佳の小さな手を包み込んだ。

そう、瑠佳が眠れないときは、いつもこうやって手を握つてやつていた。瑠佳が眠れるまで、そつと見守つた。瑠佳の手はいつでも、夏のイヤになるほど暑い日も、冬の凍えるような寒さの日も、いつだって暖かかつた。ぬぐもりを失うことはなかつた。

顔は紙のようになじて白く、生氣を失つていた。包みこんだ手は氷のように冷たい。長いまつげは伏せられたまま、ピクリともしない。それじゃあ、まるで……まるで……

「まるで、死んだ……みたいだよ……」

俺の目から、熱い雫が零れ出た。それは瑠佳の頬に落ちる。いくつもいくつも。

「おい、おい…瑠佳、瑠佳…！」

俺は今まで瑠佳の前で一度も泣いたことが無かつた。寂しいだろうから、せめて俺だけは明るくしていようと、泣かなかつた。

「なんで…こんな…冷たいんだよ…。なんで…返事…」

俺は、冷たくなつた瑠佳の体を抱きしめた。

「ほら…くまのぬいぐるみ…お前、欲しがつてただろ…？誕生日プレゼント…」

そして震える手でくまを見せる。瑠佳は、反応しない。

「なんで…なんで…瑠佳が…こんな…」

本当なら今頃ケーキを食べて、みんなに祝われて、幸せそうにしているはずだつたのに。

俺はくまを抱きかかえたまま、床にへたり込んだ。涙が、すでに雨で濡れてしまつたくまに染みていく。

誰が、瑠佳をこんなにしてしまつたのだろう。あんなに優しい子を、誰がこんなにしてしまつたのだろう。

「誰が…誰が瑠佳を…！」

瑠佳を失つた言い表せない喪失感と悲しみは、一瞬で犯人への憎しみで塗り潰される。俺は気づけば、警察の喉元に飛び掛つていた。

「クソッ…誰が…！」

「お兄さん。気持ちは分かりますが、落ち着いて…」

「落ち着いて…られるかよ…クソ…クソ…」

憎しみに全ての感情が支配される。誰が、どこのどいつが、瑠佳を…。

ダレガ…ダレガ…ダレガ…ルカヲ…「ロシ、タ？」

再び地面にへたり込む。体に力が入らない。

「クソッ…畜生…」

醜く顔を歪ませながら、なんども地面に拳を叩きつける。拳が擦り切れ、痛みが走る。血が…。

「こんな…こんな…つ…！」

こんな痛み。こんな苦しみ。瑠佳は、もつと苦しかつただろう。どれだけ痛かつたろう。たぞ辛かつたろう。

ごめん。迎えにいつてやれてれば、こんなことには…。

消えることはないと思っていた命が消えると、人はこんなにも壊れてしまつのか。

俺の叩きつける拳の音だけが、静かな部屋の中に響いていた。

『いつてきまわ』【3】

+++

+

俺はあの後家に帰った。どうやつて帰ったかは覚えていない。泣き叫び、暴れたのだろう。とても一人で帰れる状態ではなかつた。警察が家まで送り届けてくれたらしい。

警察が帰つたあと、俺はしばらく部屋に立ちすくんでいた。ここは、こんなに広かつただろうか。瑠佳がいなくなつただけで、ここはこんなにも広く、静かになるなんて。

ケーキの蠅燭に火を灯す。七本の蠅燭は、優しく、静かに揺れた。

『誕生日、おめでとう』

人は、こんなにも簡単に炎を消すことができるんだ。人の命はこんなにもあつけなく、弱弱しくて…。自分もそんな人間の一人だと思うと、嫌悪感が募る。

瑠佳、俺は…兄ちゃんは…こんなにも弱い人間なんだよ…?

そして、炎を吹き消した。あたりは暗闇に包まる

それでも同じように、朝は訪れる。

どんなことがあっても、太陽の光は平等に降り注ぐ。

犯人はまだ捕まつていない。瑠佳の人生を奪つた奴が、いまものうのうと『生きている』なんて。そいつが、言い表しようもないほど憎い。今まで一度も抱いたことのない感情。苛立ちに似た、身体を引き裂かれるような痛みを伴う感情。

でも、きっとそいつは警察が捕まえて、死を以つて罪を償わせるだろう。今俺がすべきことは、そいつを捕まえて償いをさせることじゃない。そう、俺がしなくてはいけないことは…

俺は虚ろな目で立ち上がり、台所へ向かう。

鋭利な刃物を取り出すと俺は自嘲氣味に笑った。この世にもう未練は無い。

『待つてろよ…兄ちゃんも、今行くからな…』

そして、冷たい刃物を自分の肉体に押し当て、俺は…俺は

+++++

服の上から、キツく胸に巻かれた包帯を触る。鋭い痛みが走った。

「祐太…実沙希…」

俺は顔を上げ、遠くから歩いてくる制服姿の男女を見つめた。水崎祐太と刈谷実沙希。親友と幼馴染の姿を。

俺が目覚めたとき、聞こえてきたのは幼馴染の啜り泣き。それに親友の『馬鹿野郎』といつ喝と張り手だつた。そして涙目の親友が言つた。『お前は瑠佳ちゃんの分も生きなきや駄目だらつ』と。

「拓哉、傷は?」

実沙希の問いかけに俺は曖昧に首を傾げる。何針も縫つたのだから本当なら何ヶ月も入院していなくてはいけないのだが、瑠佳をそのままにはしておけないと無理を言つて、ここまで出てきた。

結局俺は死ねなかつた。心臓に大きな傷を抱えて、生きるしかなかつた。

それからはずつと病院に入院していく一度も家に帰つていない。家の片付けは、隣のおばさんがやつてくれたらしい。無表情で、血だらけになりながら自分の体を切り裂く俺を、一番最初に見つけてくれたのもおばさんだつた。

「さつさつ」で、警察の人に会つた

「ああ」

「お前はずつと寝てたからな。…早い話が、犯人が捕まつた
え…？」

「森田慎司。20代後半の、フリーター。殺す気は無かつた、と言
い張つているらしい」

俺の中で、憎しみという感情が膨れ上がる。

コロスキハナカツタ？ジャアナンデ、ルカハシンダノ？

俺の手が、怒りにわなわなと震える。

「森田慎司…」

モリタ、シンジ。モリタシンジ。モリタシンジ、モリタシンジ、
モリタ…

「落ち着け。もう一つ、奇妙なことがあつてな…」

「奇妙な…」と？」

「まだ決まつたわけじゃないからなんともいえないが…」このままじ
や、森田は無罪になる

「ちょっと、祐太！…それはまだ…」

実沙希の声が遠くに聞こえる。

「はははは。何言つてるんだ？この後に及んで『冗談なんか言つなよ』
氣が狂つたかのようにな笑いすると、実沙希と祐太を交互に見た。
その表情は重く、険しかつた。

「冗談じやない」

「…は？」

「森田には、このままじや極刑はおろか実刑が『えられるか分から
ない』

俺は、言葉を失つた。

「は？なんでだよ。捕まつたんだろ？」

「それが…。森田慎司は、三ヶ月前に死んでいるんだ」

モリタハ死ンデル……？

「…ふざけてんじゃねえよ」

俺は、祐太の襟元を掴んで捻りあげる。

「死んでる？ はははっ！！ 馬鹿にすんなよ。 森田は生きていて、 瑠

佳を… 瑠佳を殺しただろ！！」

「だから奇妙だつて言つただろ！！」

祐太も俺の襟を掴み、 その衝撃に俺たちはそのまま地面に転がる。

椅子の転がる、 激しい音がした。

「混乱しているのはお前だけじゃない！！ もし本当に森田が死んでいたんだとしたら…」

「森田は生きてる！！」

「もしも、 だ！！ もし死んでいたんだとしたら、 法じや裁けない」

「じゃあ瑠佳はどうなるんだよ！！」

頭が混乱してする。 感情のコントロールができない。 分かる感情は、 憎しみ。

俺は本能のまま、 祐太に殴りかかった。

祐太はそれを手で受け止める、 俺の頬を思いつきり殴った。

「落ち着け！！ 話を聞け！！」

「くそ…」

俺はそのまま、 床に転がった。

「今の時点では何がなんだか、 警察も分かつてない。 だからお前は、 今は生きり」

「…やる」

死ンデヤル。 死ンデヤル… 殺ロシテヤル

祐太の声は、 俺の耳には届いていなかつた。 憎い。 その、 森田と

いう男が… 二クイ

「…頭、 冷やしてくる」

「拓哉…！」

殴られた頬を押さえ、 俺は立ち上がる。

俺の名前を繰り返し呼ぶ祐太に背を向け、 雨に濡れるのもかまわ

すに外へと出て行つた。

+++++

瞬く間に全身が雨に濡れ、雨が怒りで火照つた俺の体を冷ましていく。自分がどんどん壊れしていくのが分かつた。

そのとき、俺の胸ぐらの高さに傘が差し出された。

「お兄ちゃん。風邪引いちやつよ」

「え…？」

一瞬、言葉を失つた。小さな女の子の手が、必死に俺に傘をかぶせようと伸ばされる。瑠佳によく似た、背格好の…。俺は振り向くと、そこに立つ女の子に向かつて微笑んだ。そつと傘を受け取ると、しゃがんでその女の子にもかぶせる。

「ありがとう。…カナちゃんだけ？」

「うん。」「うん。」「

「…」「めんね。誕生日会、できなくて」「

そつと女の子、瑠佳の友達の、カナちゃんの頭を撫でる。

この子は瑠佳じゃない。一瞬でも期待した。これで思い知られた。瑠佳は戻つてはこないんだ。

暖かい雰が頬を伝つ。きっと、瑠佳は俺が死ぬことを望んではいるなかつただろ。瑠佳は、優しいから。

瑠佳が死んだから。瑠佳は一人ぼっちだから。瑠佳は寂しいだろうから。そう言い訳をして、瑠佳の傍に行くといつて、俺は『死』に逃げた。あの子はそんなことでは喜ばないと分かっているのに。死ねば瑠佳と同じようにいけると思った。でも、全ては俺の自己満足。

「『』めん…」

「お兄ちゃん、泣いてるの？」

「大丈夫？」

小さい手が、俺の涙を拭う。

「うん。もう大丈夫」

「よかつた。……るかちゃんが『遠いところ』にいらっしゃって、力ナすつじく寂しいから……。瑠佳ちゃんのお兄ちゃんは、もつと寂しいでしょ？」

俺は固まつた。悲しいのは俺だけじゃない。この小さな女の子も、瑠佳がいなくなつて寂しいと言つてくれる。

「寂しいよ。すつじく寂しい」

「か、力ナに何か、できることはない？」

こんなに小さな子でも、人を気遣うことができる。人を思いやつて、慰めることができる。どうして人間は、そんな当たり前のことにはづけないのであう。六歳の少女でもわかることが、なぜわからぬ……？

俺は力ナちゃんに優しく微笑む。

「じゃあ、一つおねがいしてもいい？」

「おねがい？」

「瑠佳のことを、ずっとずっと覚えていて欲しいんだ。力ナちゃんのお友達の中に、楠木瑠佳っていう女の子がいたことを、覚えててくれる？」

力ナちゃんは一瞬ポカンとしたが、どびつきりの笑顔で答えた。

「うんっ……」

俺は、このときの笑顔を一生忘れないだろう。

これで安心だ。たとえ俺がこの世から消えてしまつても、瑠佳を覚えてくれている人はいる。

だからって、むざむざ命を投げ出すことはもうしない。死ぬなら、あの男 森田を道ずれにしてやる。

覚悟を決めた。どうせ壊れるなら、壊れるところまで壊れてみよう。墮ちるところまで墮ちてみよう。

「瑠佳。『いつてきます』を言つたら、『ただいま』も言わないと駄目だつて、あんなに言つただろう」

俺はそう言つて、涙を拭つた。

森田がどんなトリックを使つたんだとしてもそんなことは知らない。法で裁けないのなら、俺がこの手で裁いてやる。手が汚れたつてかまわない。

「これからが、俺の復讐劇の始まり。

そして、幸せな時間の終わり。

第一章 家族【1】

放課後 ホームルームが終わると、俺は重い鞄を肩に担ぎ教室を出る。

「なあ、楠木。お前今日暇か？高校の女子と遊ぶんだけど、お前もこねえ？」

そんなに親しくもないクラスメイト…名前は忘れた。そいつが話しかけてきた。高校というのは俺が通う高校のすぐ近くにある女子高だ。

「いや、俺は、家で妹が待つて…」

反射的にそう断ろうとして、口を噤む。俺は今まで一度も学生らしい『遊び』というものをしたことは無かった。平日は瑠佳が学校から帰ってきていて、家に一人にするのも心配だし、休日は休日で家事やなんやで忙しい。だから俺は少しクラスで浮いていくことが多かった。

でも、それは苦では無かった。瑠佳の将来を考えれば当たり前のことだし、そのことが理由で、俺がクラスメイトからハブられることはなかった。そんなに馬鹿らしい幼稚なことをする連中はいない。

「どうした？ 行くのか？」

もう、家で待つてくれる妹はいない。俺は自嘲氣味に笑つて答える。

「いいよ。行く

「マジか！ やつた

「俺、そういうのよくわかんねえけど

「いいよ。お前はビジュアル担当だから。じゃ、また後でな

「ああ

クラスメイトが走つて帰つていくと、背後から声をかけられた。

「いくの？」

「ん？ 実沙希…」

実沙希は友達を先に行かせると、俺に詰め寄った。

「無理、してるんじゃない？ 本当なら学校くるのだってキツいんでしょ？」

「別に」

本当はここ数日、とこづか、あの田かわづと、まともに寝ていない。

「別に。何？」

「別に。ちょっと気晴らしだよ」

「…拓哉、変わったね」

「…」

俺は何も言わず歩き出す。

「復讐だけが、全てじゃないよ？」

「…分かってる」

+++++

「そうだ。ここいつは俺の知り合いの楠木拓哉。ビーツヘ・カツ コイイでしょ」

俺は自分の話題に反応して、飲んでいた飲み物から顔を上げる。
「わあー。石井クンの知り合いにこんなイケメン君がいたなんて。拓哉君、よろしくねー」

向かい側に座っている高生が俺に話しかける。俺は軽く会釈する。

今、俺の周りには数人の男女が座っている。一人はさつきのクラスマイト。他は全く知らない人ばかりだった。

「歌っちゃいます」

「カツ」「...」

「ヒュー」「...」

「...」

周りのテンションが次第にあがっていくにつれて、俺は少しずつ冷めてきた。なんだか、場違いな気がする。…正直、アホらしい。

例のクラスメイト、石井が歌い終わると、俺は静かに席を立つた。

「「めん。やつぱ俺帰るわ。用事思い出した」

「えー。帰っちゃうのー？」

「まあまあ。俺がいるからいいじゃないか

「ビジョアル不足だよー」

俺は石井にもう一度謝ると、石井は笑って首を振った。

「いいつて。無理言つて頼んだの俺だし。気にすんな

「ほんと、「めん」

そう言つて俺は、逃げるようつそこの後こうした。

+++++

高校生の『遊び』なんて、たいして面白いものでもなかつた。これだつたら、瑠佳と遊んでやつてはが楽し。

「違つ」

あの日からもう一ヶ月も経つといついた。それなのに、瑠佳の影が頭から離れない。薄れるどけるかどんどんと濃くなつていく。

「お兄ちゃん...」

「...?」

気がつけば小さな女の子が、しきりに俺の袖を掴んでいた。

「ねえ、お兄ちゃんつてば...」

「どうしたの?」

女の子の背の高さに合わせてしゃがむ。くじくりとした大きな目が特徴的な、可愛い子だ。

「ボールがね、あそここの木の上に引っかかるやつて…」

見ると、近くに大きな建物があつて、女の子が指をさしている先は、その敷地内の木だった。確かにボールが挟まつていて、まわりに子供たちが集まつていた。

「ん…ちょっと待つてて」

俺はフェンスをまたぐと、腕を伸ばしてボールを取つてやる。

「ほら」

「わあっ。ありがとう…お兄ちゃん…！」

俺がボールを手渡すと、女の子は元気に礼を言つた。

「お兄ちゃん、か…。そつだ、君は、どこの子なの？」

「ん?ここだよ」

女の子が指差す先は、さつきの建物。玄関には『しらゆり園』と書かれていた。

「しらゆり…園？」

小学生ぐらいの子もいるし、幼稚園ではないだろ?。

「あ…す、すみません…！」

建物の中から、若い人が走つてくる。

「あ、いや、気にしないでください。この子のお母さんですか？」

女人にそう問い合わせると、困ったように笑つた。

「お母さん、というか。この子達みんなの親代わりですかね」

「はあ、親代わり…じゃあここは…」

「身寄りのない子たちが、共同で生活をしているんです」

女人は、少し寂しそうに笑つた。

「ここにいる子達は、みんな親に捨てられて…」

「そなんですか…」

俺が少し見てくると、女人は優しく笑つた。

「ふふつ。子供、好きなんですね」

「まあ、はい。でも、なんですか?」

「いいえ。ただ、お兄さんが子供達を見る時、とつても優しいから」

「女の人はまぶしそうに田を細める。

「この子達は、私には絶対に分からぬ影を背負つてゐる。当たり前の家族が、この子達にはないんです。…お兄さんのご家族は、きっと優しい人たちなんでしょうね」

「…妹がいるんです。俺の家族は、その子だけ。とつても、優しい子なんです」

「まあ…。じゃあ、兄妹一人で?」

「父さんは妹が生まれる前に死んで。母さんは、出て行きました」
子供たちの後姿を眺める。その景色はしだいに滲んで、夕焼けに墨絵のように広がつた。

「口口の子達と、似ています…」

「すみません。会つたばかりなのに、こんな話」

「いいんです。…また、来てもらえますか? 今度は子供たちと遊んであげてください」

「はい。もちろんです」

俺は笑つて答えた。この女性には、瑠佳が殺されたことは言わないとおこつ。言つてもどうにもならないし、この人の中で瑠佳が生きているなら、なんだかうれしい。

それに俺自身、まだ瑠佳が死んだといつことがいまいち理解できていなかつた。だからつい、『妹』の話をしてしまつたのだと思つ。

「お兄ちゃん、またね!—

「今度はアカネちゃんとばつかりお話しないで、一緒に遊ぼうね!—

「バイバイ」

帰路に着いた俺の背中に、子供たちの声が迫りかけてくる。

「おう、じゃあなー！」

俺も大きく手を振つて答える。アカネちゃん、というのがさつきの女性だということは、なんとなくだけ分かる気がした。しらゆり園を出た俺の心は軽く、また足取りも軽かつた。子供たちと触れ合えたことが、よかつたのかもしれない。

俺は少しづつ、本当に少しづつだけど、瑠佳の死を、悲しみや憎しみとこう形ではなく、心で受け入れようとしていた。

「あ、すみませ……」

角を曲がったとき、人にぶつかって、反射的に謝る。でも、なかなか続く言葉は返つてこなかつた。俺は不思議に思つて振り返る。そこにいたのは……。

細くて、化粧つ気がなくて、やつれて不健康そうな女性。俺は驚きに立ち竦んだ。昔より、かなり瘦せてやつれてはいるけど、この人は確かに……。

その女性は俺を見て、その場に泣き崩れた。

「あ……あ……あんたは……」

俺は女性を震える指で指差して、言つた。

もう一度と、呼ぶ」とはないだらうと思つていた言葉を。

もう一度、「会つ」とはないだらうと思つていた人に。

「あんたは、母さん……？」

やせ細り、苦しそうに泣く姿は、それでもまだわもなく俺の記憶の中の母をさだつた。

家族【2】

今、部屋の中には俺と母さんの一人がいた。

「…久しぶりね」

俺はできるだけ母さんをみないようにながら麦茶をテーブルに置く。力チャ、と氷とコップがぶつかる音がした。

「拓哉、あなた大きくなつた。それに、とっても大人っぽく…」

「4年も経つんだ。当たり前だろ?」

「そうね…」

母さんは随分と老けたように見える。歳のせいもあるだろうが、俺の記憶にある母さんはいつでも若々しく綺麗で明るかつた。しかしそこには俺の知っている母さんはいなかつた。体は痩せ細り、ほととじん骨と皮だ。頬がやつれて目が落ち窪んでいる。まるで骸骨のよう。

「…」の写真…この子が瑠佳?」

「ああ」

「大きくなつた…」

まるで長年会つてなかつた、甥っ子か姪っ子でも見たような口で

言つ母さんに、俺の怒りが募る。

「瑠佳は…まだ帰つていの?」

「瑠佳は帰つてこない。…死んだ」

母さんは、写真を取り落とした。

「瑠佳が…死んだつて…」

「…だから、来たんだと思つてた」

「そんな…知らなかつた。…私、再婚するの…。だから今日は、一

緒に暮らそうと思つて…迎えにきたのに…」

迎えに来た?どの面下げて言つてやがる。俺はその台詞を、済んでのところで堪えた。どこまで分勝手なんだ。

母さんは変わってしまった。父さんが死んでから、ほとんど母親らしい姿を見せてくれなくなつた。

+++++

『…母さん、瑠佳が泣いてるんだ。なんでか、分からない』

『お腹でも減つたのよ』

母さんはソファーに寝たまま、俺のほうを振り返らずに言つた。

『飲ませてあげて?』

『母さん疲れた。粉ミルクでも作つて、あなたが飲ませてあげて。

お兄ちゃんでしょ』

『う、うん。でも、作り方が…』

『…缶の横に書いてあるから。見ながら作りなさい』

俺はがっくりと肩を落とすと、泣き叫ぶ妹のため、台所へ走る。本当は、瑠佳が泣いていた理由は分かっていた。粉ミルクの作り方も分かっていた。母さんに、優しい『母親』に戻つて欲しかった。…父さんが死んでから、母さんはずっとあんな調子だつたから。

『瑠佳ー。ほら、おいしい?』

俺が哺乳瓶に粉ミルクを溶かして、人肌に温めて持つていってやると、瑠佳はよろこんでキャッキャッと笑つた。

『あーあ。もう飲んじゃつたよ』

空になつた哺乳瓶を横に置き、瑠佳を抱きなおす。すっかり泣止んでご機嫌になつた瑠佳は、さつきから俺の指を握つたり離したりしていた。

『ほら、にーにーだよ。にーにーって言つて』『らん』

俺は瑠佳に顔を近づける。微かにミルクの匂いがした。

『んーあ。んーん?』

『にーにー』

『んーに。んー』

『惜しいんだけどなあ』

『んー?』

きょとんとした顔で見つめ返す瑠佳。俺はそつと、その頭を撫でた。くりくりとした大きな目。暖かくて、触れば壊れてしまいそうなほど小さな、俺のタカラモノ。

「母さんが守らないなら…俺が、守つてやるからな」「んあー」

小さなタカラモノは、キラキラと輝く笑顔を見せた。

+++++

「母さん…知らなかつた。瑠佳が…」

「なに言つてんの?」

俺は、優しく言つた。このまま、母さんを励ましてやればいい。離れて暮らしてたんだから、しかたないよ。母さんは悪くないよって。

「あんたは母親なんかじゃない」

「無理だ。この女に俺は優しくなんかできない。」

「コイツはほとんど瑠佳に愛情を向けてやらなかつた。愛してはいただろう。大切には思つていただろう。でも、優しくしてやらなかつた。母親の顔を見せてやらなかつた。」

「知らなかつた…」

俺は立ち上がりつまつすぐに睨む。

「教えよつにも…あんた、俺に連絡先を知らせなかつただろ。それが、いまさらのこのこやつてきて…」

「拓哉……」

怒りが腹の底から湧き上がつてくる。森田に向ける怒りとは違つ、誰にもぶつけのことができなかつた、四年分の怒りが、爆発する。

「ふざけんなよ……俺たちが、今までどんな気持ちで生活してきたのか……瑠佳が……どんな気持ちで……ずっと……」

「本当に、最低なことをしたと思つてゐる。『じめんなさい……』

そう言う母さんの声は、震えていた。

「『じめんなさい？あの時、もしあんたが俺達の傍から離れなければ、瑠佳は死ななかつたかもしれない。あんたがもし、瑠佳の近くにいたなら……』

詰る。傷つける。

「あんたなんか、母親じやない。母親だつたら、俺達を捨てたりしないだろ？……俺達を……瑠佳を……まるで……まるで『アリミ』みたいに……捨てたくせに……！」

俺の目から大粒の涙が流れる。声を出して泣く。悔しい。俺は自分に嘘をついてきた。

母さんは俺達を捨てたわけじやない。母さんは俺達のことを忘れて幸せになるべきだ、つて。でも、違う。心のどこかで俺は、この女は俺達を捨てたんだ。自分で幸せになろうとしている、卑怯な奴なんだ、つてずつと想つていた。

俺の心は、四年前のあの日から全く成長なんてしていしないんだ。

「だつて、そうだろ？あんたにとつて、俺たちはアリミでしかなかつたんだ……いきなり来て、母親ヅラして……一緒に暮らしましよう？……もう手遅れなんだよ！……なんでわかんねえんだよ……なんで……」

俺はもう、壊れたんだ。

「なんで……それを……四年前に言ってくれなかつたんだよ……」

四年前にそう言って、俺と瑠佳と三人で暮らしていれば……。

「帰れよ」

でも、もう手遅れなんだ。

「たく…」

「帰れよ…」

俺は、母さんの手を振り払い、麦茶の入ったままのコップを投げつける。コップの中身が、容赦なく母さんの細い体に降りかかった。「…あなたの気持ちを踏みにじったこと、ごめんなさい。もう、あなたの前には現れないから。でも、これだけは受け取って欲しいの」「これ…」

田の前に差し出された、小さな封筒を俺は受け取る。

「写真…？」

「拓哉。最後に、あなたは私の子供だなんて思いたくもないだろうけど…。私の息子に生まれてくれて、ありがとう。…本当にごめんなさい」

母さんが、俺の前に現れる「」とは一度と無かつた。
残されたのは空のコップと、一枚の写真。

「」の写真は…

その写真は、俺と母さんと父さんの三人で写っている写真だった。それは一瞬、瑠佳が生まれる何年も前のものだと思ったが、違った。裏に、母さんの字でこう書いてあった。

『拓哉の、（甘えつ子）お兄ちゃん記念日。父さん・母さん・拓哉・
るか』

「これは…」

俺の記憶の中で、一番幸せだった瞬間。唯一、俺の『家族』が全員揃つた瞬間。

俺はその写真を写真立てに入れ、テーブルの上に飾った。テーブルの上には既に、父さんの写真、瑠佳の写真、俺と瑠佳で撮った写真が飾られている。横にはくまのぬいぐるみと、赤いランドセルが置いてあった。

「これで、いいんだ…」

きつとこれが、俺達『家族』のあるべき姿なのだから

家族【2】（後書き）

回想があくまで「めんなさい」。文章力が無ければつかりに…（Ｔ^Ｔ；

家族【3】

俺は今日、無断で学校を休んで家にいた。後で問いただされるだろうがどうでもいい。体が酷く重い。

昨日 あの後俺は、夜中になるまで特に目立つことはしなかつた。完全に母さんは縁を切り、俺は一人になつた。母さんと繋がつているのものは、この俺の体に流れる血と父さんの楠木の姓だけだ。尤もあの女は再婚する気らしいから、楠木の姓は捨てるのだろう。俺達を捨てたときのように、『ひみつの』のようだ。

「つ……」

家にいたら駄目だ。ここにいたら、もう憎みたくも無い人まで憎んでしまつ。無意識に傷つけてしまつ……。

そう思つて俺は、家を出た。

それなりに活気のあるあたりにくると、俺は途端に後悔した。自分が学校をサボつていることを忘れていた。補導されるかもしれない。

「もう、帰るか……」

なんとなく帰りたくは無かつた。かと言つて、学校に行く気にはやはりなれなかつた。

そのとき俺の脳裏に浮かんだのは、たくさんの子供たちと、優しく微笑む女性。ひとつ、『しらゆり園』。アカネさんは、学生ではないらしいからいるのかもしれない。ここからあまり遠くもないし、ためしに行つてみよう。

+++++

「あっ。昨日のお兄さん。」「んにちせ」
「どうせ、りんにちせ」

案の定、アカネさんはいた。俺は微笑むと軽く会釈をする。子供たちは小学校や幼稚園に上がる前の子達が、元気に遊んでいる。「あれ？お兄さん、学生さんじやなかつたんですか？昨日はたしか制服…」

学校に行くわけではなかつたので、今日はジーパンにTシャツといつラフな格好をしていた。

「えつと…振休なんです。振り替え休業」

「なるほど…！…そうだつたんですか」

アカネさんはポンと手を叩くと、優しく笑つた。その笑顔が、罪悪感となつて微かに俺の胸を締め付ける。

「あっ。すみません。私はこれで…」

「何か用事があるんですか？」

「ええ。ちょっと用事があるのでこれから出かけるのだけど…」

アカネさんはそう言つて、近寄つてきた男の子の頭を困つたように撫でる。

「本当は、今日はこの子達と遊ぶ約束をしていたの」

「ねーえ。きよおは遊ばないの？」

「ごめんね。また今度、遊ぼうね」

男の子は悲しそうに俯く。

「…俺、この子達と遊んでまじょうか？特にすむじともなくて暇だし」

「本当ですか…！…ありがとうございます。よかったです」

俺は腕捲りをして、男の子のまづくいく。男の子は不思議そうに顔を傾げたが、警戒はされていないみたいだ。

「よーし。今日は兄ちゃんが遊んでやるからな。名前はなんていうの？」

「ん、しゅん…！」

「おひ。カツ」「イイ名前だな。俺は拓哉。た・く・やだよ」「たくあ？」

俺のそんな姿をアカネさんは見、笑つた。

「じゃあ、お願ひしますね。夕方までには戻ります」

「はい！-任せください」

「ふふ。任せました。俊、お兄ちゃんにこいつぱい遊んでもらつてね

ー

「うんっ」

俺はアカネさんを見送ると、俊の小さな体を樂々と抱いだ。

「よーし。ほら、肩車」

「わあ！-すつ『ごくたかーい！-』

「そつだろ？落つこちるなよ」

俊はキヤツキヤツとほしゃいで、俺の髪をぎゅっと握る。

「痛たたた…つてん？」

気が付くと俺は、好奇心旺盛な子供たちに囲まれていた。

「おにいちゃん、だあれ？」

「俺は…」

「このひとは、たくあ兄ちゃんだよ」

俊が俺にしがみついたまま、白面子で言つ。

「たくあおにいちゃん。だつこーーー！」

「ぼくもーー！」

子供達の中で、俺は『たくあ』と覚えられてるらしい。本当は

『たくや』なのだけど…別にいいか。

「わかつた。わかつた。順番な」

俺はその後、子供たちを順番に肩車をしたり、抱き上げてぐるぐると回してやつたりした。子供達は、普段こんなにアクティブに遊んでもらつてないのか、俺の想像以上に喜んでくれた。…のだけれど。

「ま…待つた。げほつ…ちよ、休憩…」

「えー。もう終わりなのー?」

はりきつすぎたのか、それとも運動不足だからか、あつといつまにスタミナ切れになってしまった。…不覚。それにしても…

「おにいちゃん、はやくー」

「だから…待つてつてば…」

「はやくはやく…」

どうしてこんなに子供は元気とこりか、タフとこりか。疲れているよつこは全然見えない。

「も…無理。限界…」

俺は走るのをやめ、草の上に寝転ぶ もとと倒れこんだ。

「こんなに元気な子達と毎日遊んでいるアカネさん達は、凄い。

「遊ぼー!」

「兄ちやんちよつと疲れ…ぐせつ。俊、腹の上に乗っかるなー!」

「わあ。おもしろいー!」

「面白くな…わつ。だから乗るなつてー!」

あつといつ間に俺は、子供達に上に乗られてしまった。痛くはないが、少し重い。

「まらほらじけろ。こり」と聞かないやつは…」うだだ…

「あやああー!…ぐすぐつたー!…」

「はははー!」

俺の上からびか もとと転げ落ちた子供達は、俺の真似をして草の上に寝つこりがる。よく、一緒に遊びに出かけたときに瑠佳ともじじて寝つ転がつたつは。そつして瑠佳は、決まつてこいつは。

『あつがとつ』

「…お前らめ、今、幸せか?楽しいか?」

「しあわせ?」

首を傾げる俊の頭を、俺は優しく撫でる。

「まだ、分からぬいか」

「？でもね、たくあ兄ちゃんと遊ぶのは楽しい」

「そう…」

あともう少し大きくなつたら、自分達がここで生活している意味を知るだろ。ここで自分達を育ててくれている人たちが、母親といつ存在や、父親という存在とは違うものだと。共に過ごしている仲間が、兄弟という存在ではないと気づくだろ。自分には『家族』という存在が欠けていると気づくだろ。

そのときに、この子達は今と同じように笑えるだろか。無邪気なまま、笑顔で人を幸せにできるような子になれるだろか。

お互いに助け合い、手を取り合つて、笑顔で生きていくだろか。

「お前達なら、きっと大丈夫…」

俺は独り言のように呟く。

きっと、自分を捨てた両親のことを憎むだろ。それでも俺のようには腐らないで欲しい。たとえ何があつてもまっすぐに進んで欲しい。

「たくあ兄ちゃん？」

不思議そうに俺を覗き込む俊。俺は笑つて、その小さな頭をガシガシと撫でる。

「俊…」

「なあに？」

「よしつ！…もう一遊びしてくるか…！」

俺が伸びをしてそう言つと、俊は目をパチクリさせ…

「うんつ」

最高の笑顔で頷いた。

何があつても、その笑顔を忘れるな

+++++

「お帰りなさい」

俺は立ち上がりつて、微笑んだ。

「すいません。勝手に上がり込んで」

「かまいませんよ。あれ、みんな寝ちゃったんですね」

「はい。はしゃいでたから、遊び疲れたんだだと思います」

「ふふふ。お兄さんも、疲れたんじゃないですか？」

「ここの子供達は、みんな元気ですかね。流石に疲れます」

アカネさんはお疲れ様です。と笑うと、はつとしたよろこびで俺の顔を見た。

「どうかしましたか？」

「いえ…そういうえば私、お兄さんの名前も聞いてなかつたよつな…」

俺達は顔を見合わせると、お互に吹き出した。そして、子供達が寝ていることを思い出してしーっと声を落とす。

「今更ですが、私の名前は…」

「アカネさん、ですよね？」

アカネさんは首を傾げると、不思議そうな顔をした。俺は慌てて付け足す。

「この間、子供達が『アカネちゃん』って呼んでたので」

「ああ、なるほど」

納得したよろこびで頷くと、ポンと手を叩く。俺はそっと胸をなでろした。…なんで緊張したのかわからないけど。

「改めまして…。町野茜と申します」

「えーっと…」

これからは宮野さんと呼んだほうがいいのか、茜さんと呼んだほうがいいのか、且惑う。それを察したよつこ、茜さんは苦笑した。

「茜でいいですよ」

「俺は楠木拓哉です」

「じゃあ、私は楠木さんと呼ばせてもいいですね」

「あつ拓哉でいいです。堅苦しこですしひ」

茜さんのほうが年上だと思つて。と付け足すが、茜さんは首を振つた。

「いいえ。楠木さんって呼ばせてもいいこます。ビーハーでも嫌ならいですけど……」

「嫌つてわけじゃないですか？」

「んー。でもやつぱり、楠木さんよつもお兄さんのほうが呼びやすいかもです」

茜さんはやつぱり、悪戯が成功した子供のような顔をする。

「改めてよろしくです。楠木さん」

「い、いや……」ひからいひからいです。茜さん

俺達はやつぱり、なんだかむず痒い気持ちになつて笑つた。

「ふふ……やつと笑つた」

「え？俺笑つてませんでした？」

茜さんや、子供達の前では結構笑つていた記憶がある。

「あ、いや、笑つてはいたんですけど……なんとなく、影があるような気がして。それが今のは、高校生らしこ、無邪氣つていうか、子供っぽいっていうか……」

「子供っぽいですか？」

「あーーーごめんなさい。……怒つちゃいました？」

そう言つて顔の前で手を合わせる茜さん。年上なのに、なんだか

頼りないっていうか。

「ははは。別に怒つてませんよ。子供っぽいなんて言われたことなかつたので」

「そうなんですか？」

「はい。むしろ大人びてるつていうか、無駄に大人っぽさがあるって言わることばっかりですね」

昔から、何もかも完璧でどこにも穴がない、『大人すぎる、どこか悟った子』だった俺。『子供っぽい』なんて一度も言われたことは無かつた。

「そうですか？私は一回会つただけで、結構子供っぽいと発見しちやつたりしたんですけど」

「どんなところですか？」

「それは…秘密です」

き、気になる。

「な、なんで秘密なんですか？」

「なんで秘密かなんて、秘密だから秘密なんですよ」

「茜さんのほうが、子供っぽいと思います…」

「ふふふ」

一回会つただけだけど、なんだか読めない人だ。…天然？

「う…ん…」

「あ、起きちゃったかな」

茜さんが屈むと、俊が布団から這い出してきた。

「ん…あかねちゃん？帰ってきたの？」

俊は手を伸ばして、無邪気に茜さんにだっこを求めた。茜さんは優しく抱き上げ、髪を撫でる。

「楠木さん…拓哉お兄ちゃんと、何してあそんだの？」

「たくあ兄ちゃんの、肩車が高かつたの…」

「そつか。怖くなかった？」

「こわくなんか…ふあ…」

茜さんがそつと尋ねると、俊は大きな欠伸をした。

「まだ、寝てもいいよ？」

「ううん…たくあ兄ちゃん…」

「どうした？」

「こっしょに遊んでくれて… ありがとうございます」

眠そうな顔をこすりながら、笑顔の俊が言った。そのまま、俊は茜さんの腕の中でもう一度深い眠りについた。

「また寝ちゃいましたね」

「子供は、遊びと寝るのが仕事ですから」

他の子を起こさないように気をつけながら、茜さんは優しく手つきで俊を布団に戻す。

「ありがとうございます…」

「男の人気が少ないから、ああいつ風に肩車とかで遊んでもらえることってないんです。嬉しかったんでしょうね。歳の離れたお兄ちゃんができたみたいで」

「そうだと、嬉しいです…。こんどはまた、休日にでもきますね」
休日なら、他にも子供がいつぱいいるだろう。俺にできることといえば、その子達と遊んであげることぐらいだろうから。

「あれ、もう帰っちゃうんですか? タン飯ぐらーこ、」
駆走しようとおもったのに、

「気にしないでください。それに、他にもたくさん子供たちが帰ってきて大変でしょ?」

「そうですか…。ちょっと残念です」

本当なら駆走になりたいが、迷惑になるわけにはいかない。

「また、すぐにきます。子供達によろしく」

「はい、また。さよなら」

「さよなら」

やつ言つて、しりゆつ園を後にする。手を振つた俺に、手を振り返してくれた茜さんは、やつぱり笑顔だった。
空は、輝くような夕焼けに染まつていた。

+++++

「…」
俺は首の後ろで手を組み、家へと向かう道を歩く。それなりに広い道なのだが、辺りには人の姿は見えない。体に軽い疲労感はあつたが、それもまた心地いい。どうせ暇なんだ。来週も行つてみよう。

「あ、すみません」

「…」

前から歩いてくる男と肩がぶつかって、俺は反射的に謝る。しかし男は何も発しない。男は立ち止まる、訝しげに俺を見た。俺はそれを無視して先に進もうとするがそれを男が遮る。俺が右に行けば右に、左に行けば左に。

「あの、何ですか?」

俺も次第に苛立ち男にそう問いかける。男はちら、と俺の顔を覗き込むと、グッと顔を近づける。白いというより青白いに近い顔色と、蛇のように鋭く細い目。

「くくく…

そして、笑つた。俺の肌が粟立つ。

「あの…」

「くくく…お兄ちゃん…?」

思考が停止した。こいつ、今なんて…?

「お兄ちゃん、逃げて…。そう言ってたよ。くくく。瑠佳ちゃんだつけ…。本当にお兄ちゃんが大好きなんだね」

「つ…！」

「殺す気はなかつたんだよ…。ついておいで、つて言つても、ついてこなかつたんだ。お兄ちゃんがどうなつてもいいの?つて聞いたら、飛び掛つってきたから、ね?」

「き…さま…」

俺は気づけば男 瑠佳を殺した犯人、森田に襲い掛かっていた。

森田は抵抗もせず、されるがまま地面に押し倒された。

「お前…俺たちの何を知つてんだ?」

「楠木拓哉。高校三年、11月16日生まれの17歳。小学生の頃に父が他界。その後、母に捨てられ、今まで幼い妹、楠木瑠佳と一人で過ごしてきた。妹が森田慎司 おつと、僕か。に殺された後は天涯孤独となり…」

森田が、まるで国語の教科書でも読み上げるよつよすらすらと述べる。俺の背中を冷や汗が伝つた。この男、俺たちの何もかもを知つている。

「ちなみに楠木瑠佳は、小学一年、8月20日生まれの7歳。両親の顔も曖昧にしか覚えておらず、歳の離れた兄と一人で暮らしてきた。もつとも、7歳の誕生日に殺され、帰らぬ人に…」

「やめる」

「あれ、怒つちゃつた? ちよつとお喋りが過ぎちゃつたかな

「やめろつて…言つてんだろつが…」

再び俺の心を、憎しみが支配する。この男が、瑠佳を殺したんだ。『ロシタンダ』。この男が、憎い。一クイ、一クイ、一クイ一クイ一クイ一クイ。

「ヴ…アアアアアアアアアア…！」

今、何も凶器になるよつた物は持つていない。なら、この拳でやるしかない。殺ルシカ。

「まいつたな。ほら怒らないでよ。お兄…」

「死ね。死ネエエエエエ…！」

「まつたく。面倒な」

森田は俺の拳をいとも簡単に片手で受け止めると、起き上がって俺の前に立つた。

俺は狂つたように暴れ、『死ね』『殺す』と叫びながら、森田に飛び掛る。森田はそれを蛇のよつに細い手で睨み…。

「う…」

一瞬の間の後、勝負を制したのは森田だった。俺は、何がなんだか分からぬまま地面に倒されていた。森田が強く俺の胸を踏みつける。

「……」

「やつぱりか……。まだ、傷口が塞がってないんだろう?」

「いつ……」

抉るよつて、何度も、何度も。俺の傷を踏みつける。俺の着ていたTシャツには、いつの間にか血が染みてきていた。

「ぐつ……お前を……殺して……」

「君が僕を? どうして?」

「お前は……瑠佳を……」

俺が苦し紛れに言つと、森田は更に勢いよく俺の傷を踏みつけた。鋭い痛みが胸だけでなく、全身を駆け抜ける。

「殺した……くくく。そつか……僕は、君の妹を殺したんだな……」

「死ね……」

「くくく……はははははは……」

森田は高笑いをすると、俺の胸から足をどけた。俺はすかさず立ち上がる。血がボタボタと地面に落ちた。

「楠木……いい、いいよ……君は、僕の想像以上だ……。でも、まだ足りない。もつと、もつと踏め。もつと醜く、もつと壊れると……」

「森……田……」

「まだ、足りない……。君が僕の理想になるまでは、もつと『生け贋』が必要だね。……次に会うときまで、考えてくるよ

じゅるり、と森田が舌なめずりをした。

「楠木。また君に会えるときを、楽しみにしてるよ……。くくく

「ま……て……」

俺は、去つていく森田の後ろ姿を見送ることしかできなかつた。

森田の高笑いが、まだ耳の奥にこびり付いていた。

そして俺は氣を失い、緩やかに闇に呑まれていった…。

ガチャ、ヒドアが開く音がある。ついで聞こえてくる『ただいま～』といつ元気な声。

「…・・母さん…赤ちゃん、どう?動いた?男?女?名前は、決
まりた?」

「ちょっととちょっと、拓哉。一度にたくさん質問されても母さん答
えられないわ」

そう言うと、ランセルを投げ捨てた息子を注意する。

「まったく、せつかちなんだから。でもねまだ赤ちゃんは動かない
の」

「なんでー?」

「んー。まだ、それぐらいになるまで成長してないからかな」

「じゃあさ、男?女?」

「残念。それもまだわかんないんだな」

「ええー」

そう言つてしょげる拓哉の頭の上に、大きな手が置かれる。
「まあまあ。そう焦るなつて。そんなにすぐ分かってもつまんない
だろ?」

「わあ、父さん帰つてきてたの?」

「ああ。母さんが大変だらうからな」

大きな手の主は、そうじつて息子の髪をくしゃくしゃにした。

「じつくり待とう。じつくりな」

「そう言つて真つ先にベビー服買つてきたの、ビビの誰だつたかし
ら?」

「さあ?貴方の旦那様だつたよつな気がしますけど?」

最近のこの家の中心は、私ではなくて、私のお腹に宿る、新し
い命。拓哉にとつては、10歳以上も年が離れた弟か妹だ。

「拓哉が、お兄ちゃんかあ…」

「この甘えっ子が、お兄ちゃんかと思つとなんだか不思議な感じがする。父さんに習つて、私も甘えっ子ちゃんの頭をくしゃくしゃに撫でる。」

「わわわ。母さんまで。やめらつて」

「んー？ いいじゃない。おにーちゃん」

「お、おにーちゃんつて…」

ふと、拓哉が私のお腹を見る。まだ全然大きくはないけど、たしかに命が宿つているお腹を。

「拓哉が、兄貴ねえ…」

父さんはうなづき、わりきの私と似たようなことを口にする。

「この甘えっ子が…！」

確かに拓哉はずつと一人っ子で、『レーテ』に甘えっ子だった。だから、それが突然ピシッとしたお兄ちゃんになるとおもつと、なんだかむず痒い。

「拓哉は、弟と妹、どっちがいいの？」

「俺？ 俺はねえ…」

まじめに考える拓哉。それを見守る父さんと私。この二つのを、幸せつていうんだろうか。

「うーん。弟だったら、一緒にサッカーとかもできるしなあ…んーでも」

「でも？」

「でも、やつぱり妹がいいかな。女の子はやつぱり特別に可愛いし」

そして、とびっきりの笑顔を見せる。

「男の子でも、女の子でも。どっちでも父さんと母さんの特別な子供だつていうのには変わりないよー」

そう言つて、拓哉を抱きしめる。急いで帰つてきたのか、うつすらと汗をかいている。

「うふふ。可愛いー」

「ちょ… やめろって。ハズいじやん」

「やだー」

「おう。父さんだけ除け者にするなよー。まざでよー」

そう言つて父さんまで抱きつぐ。

うわい。ひめあらひ。墨話しいーー。」

「やだー」

「だからや

今度は私を除けて、男同士でじやれあう。

が
。 。

あ…
「…」
と/or やかは…
そして
母さんを 男三人で… てくれるのかな

ひとり言のよひにそつちくと、拓哉が振り向いた。

「母さん！赤ちゃんの名前、俺が決めていい？」

「んー。でも、まだ女の子か男の子か分からぬのよ?」

いやあ 男でも女でも大丈夫な名前にするにいししゃん 海とか

空とか

「父さんも混ぜないと」

一 父さんは駄目だ

「なんてたよー」

「父さんはネーミングセンスが無い過ぎる」

そういえば、昔飼っていた金魚に変な名前をつけられて、拓哉、怒っていたつ。たしか、漢字何文字かだつたきがするけど…。

「南国西瓜売り？あれは昔の話だよ」

「南国…國販賣に?それは本当に金魚なんでしょう?」

卷之三

…今の、聞かなかつた」といふやうかしら。父さんのセンスは、
無こと云ふよりむしれ…。

「よし、決まつた！！」

「ねつ、まつてましたーー！」

「もしかしたら父さんのヤン

せいたしから父のセンスを愛に結んでいたのがもしかなければ

「それでは、発表します……」

「ダダダダーン、ダンシ」

「アーニー、『アーニー』って何？」

「欸欸——！」

「可愛い名前ね

ゲームか、

「それはね…」

拓哉は縦ひペンを取り出すと、それにすりすりと墨をつけていく。

楠木守の「なる」と楠木住繩の「か」とて「るか」たよ

平仮名で書いた。まもるの「る」とかおりの「か」に丸をつけ、

二二二を結ぶ

「おまー、なんべ考えたな。」

はなぐてもいいの？

「アリス、おまえの言つた通り、おまえの心は、おまえの心でいいんだよ。」

中華書局影印
新編全蜀王集

「我國的國旗是五星紅旗，國歌是《義勇軍進行曲》。」

『中華人民共和國憲法』第13條第1款規定：『公民的合法的私有財產不受侵犯。』

るんだよ。…お兄ちゃん、だから

拓哉の言いたいことは分かつた。ただの甘えっ子から、甘えっ子お兄ちゃんに昇格かな。

「るかは俺の妹だから、只者じゃねえぞ」

「あらあら。母さんの娘だから絶世の美女よ」

「ふふん。父さんの息子だからな、超絶美男子だぞ」

それぞれに思い思いのことを口にする。…考えていろ」とは同じだけど。

「よーし。記念写真撮るぞ。記念写真」

「最近、父さん毎日記念写真撮るよね」

「父さんにとっては、この家族で過ごす毎日が、記念日なんだから」

「うふふ。父さん、珍しく詩人ね」

「セルフタイマーだセルフタイマー。いそげー」

「急ぐの父さんだけだよー」

私と拓哉がピースをして、父さんがスライディングをして、ギリギリに入る。

るかが生まれたら、じつやつて、またみんなでドタバタと記念写真を撮るんだろうな。今から、楽しみ。

+++++

『拓哉の、（甘えつ子）お兄ちゃん記念日。父さん・母さん・拓哉・るか』

私はやきあがつた写真の裏に、そう書く。

そして、『家族の記念写真』と書かれた大きなアルバムの一番後ろに、その写真を閉じる。アルバムの中には、拓哉が生まれたときの写真や、幼稚園の入園式と卒園式。小学校の入学式のときの写真に、誕生日。家族旅行のときの写真なんかがたくさん閉じられている。

元々は父さんが写真を撮るのが好きで、なにか家族で節目があるごとに写真を撮っていた。恥ずかしいけどそれはとっても素敵なこ

とだから、少し気が早いけど、もし拓哉やるかが大人になって、そ
れぞれの家庭を築いたらこの習慣を引き継いで欲しいと思う。

私は微笑んで、アルバムを抱きしめる。ささやかな願いを胸に。

これからもずっと四人で、幸せの写真を重ねられますように。。。

「うう…・森田の情報をう…今すぐ教えてください…」

「拓哉君！？君は病院のはずじや…」

「そんなことはどうでもいいんです…・今分かつていいことだけでいいんで、教えてください…！」

俺は一気にそう言い切つて、肩で大きく深呼吸をする。額を汗の玉が伝つた。警察所まで全力疾走してきたのだ。俺が今着ているのはいつも普段着や制服では無く、真っ白な、病院で病人がベッドで寝るときに着ているような服だ。尤も、俺は今病院から走つてきたのだが。

「君が知りたがるのも分かる。でも、こればっかりは…。無理して傷が開いたんだって？」

「俺の身体のことは、大丈夫です。だから…！」

「…森田のことについては、警察も総力を挙げて調査している。拓哉君、君が今すべきことは、落ち着くことだ」

落ち着いてなんかいられるかよ。と心の中で警官に悪態をつく。俺はあの後病院へ運ばれ、傷と疲労で三日間眠り続けたらしい。瑠佳が死んでからまともに寝てもいなかつたから。

「あれから随分時間が経つた！！流石の能無しの警察だつて、少しぐらい情報を掴んでいるんだろう…！」

「私のことを能無しと罵倒するのはかまわない。ただ、寝る間も惜しんで調査してくれている他のみんなの事を、能無しというのはやめて欲しい」

とりあえず落ち着いてくれ。と警官は俺を椅子に座らせ、自分も脇に座る。そういうえばこの警官は、いつも俺の相手をする。俺に電話をしたのも、説明をしたのも、俺が暴れて首に飛びついたのもこの警官だった。

「…取り乱して、すいません」

俺が俯いてそう謝ると、警官はにこやかに笑つた。

「大丈夫だよ。落ち着いたかい？」

「はい。…すいません。俺、最近おかしいんです。自分で自分のコントロールができないっていうか…。気付いたら、自分でも訳の分からない行動をしていて…。その度に、周りに迷惑をかけてしまつて。もう、どうしたらいいのか…」

俺は自分で自分の顔を覆う。たまに感情が暴走することがあった。自分で制御できない…というより、自分はもしかしたら制御しようともしていられないのだろうか。

「俺…変、ですか？ 病院行つたほうがいいんですか…？」

「君は変なんかじやないよ。ただ、かけがえの無い人を失つて、心が傷ついただけ。そうだろう？」

警官の顔を見ずに、「クククと頷く。それ以上に、何を話したらいいのか分からなかつた。

「きっと、君の傷はそう簡単には癒えない。心の傷も、君が瑠佳ちゃんの影を追つて付けた傷も」

「…はい」

俺はそつと、胸の傷に触れる。ちくりと痛んだ。子供たちと遊んでいたときには全く痛まなかつたのに。

それはきっと、森田が俺の傷を抉るような真似をしたから。身体的にも、精神的にも。屈辱。痛み。敗北感。憎悪。俺は森田に対しても手も足も出なかつた。飄々とした態度に戸惑うだけで、何もできなかつた。悔しい…。

「俺、森田に会いました」

「なに？」

「なぜ警察は、森田を釈放したんですか？ 彼が瑠佳を殺したことは間違いないんでしょう？」

「それは…」

警官はうろたえ、視線を落とした。

「仕方が無かつたんだ。いくら調べても、『森田慎司』は二ヶ月前に間違なく死んでいる。家族も認知済みだ。身分証から、森田本人だというのも分かる」

「でも…」

「事实上『死んだ』とされている者を、署に留めておくには限界がある。納得はいかないが、それだけだ。分かるね？」

俺は奥歯を噛み締めた。でも、俺は間違なくあいつと会つている。

「あいつ…俺達の全てを知つていました。両親がいないことも、その詳細も、誕生日まで…」

「以前、森田にあつたことは？家族ぐるみの付き合いをしていたとか…」

俺は黙つて首を振る。それを見て警官はため息をついた。

「…本当に何か分かつていることはないんですか？」

警官はきまり悪そうに田を泳がせる。

「俺…」

「分かつた。君には知る権利がある。私が交渉してこよう」
警官が立ち上がり、おそらくこの事件の代表だらう男に声を掛けた。俺はちらとそちらを見ると、そのまま膝に頭を埋める。俺は、あのを利用する。そう思つと、罪悪感がこみあげてきた。そしてそんな自分に嫌悪感がつるる。

「拓哉君、許可が降りた。別室で…拓哉君？」

「あ…すみません」

大丈夫か。と聞いてくる警官に返事を返し、立ち上がる。

「ここを行つた先に、情報が保管されている部屋があるんだが…」

「はい」

警官の声が、どこか遠くに聞こえた。

+++++

「あの……えつと」

名前が分からぬいため、なんと呼んでいいのか。警官さん、と呼ぶのは失礼な気がする。

「ん？ ああ。名前は初めて会つたときに伝えておいたはずなんだが……。君は混乱していたし無理も無い。私は桐嶋。こう見えても刑事なんだよ」

「刑事……」

「まあ警官でも刑事でも、そんなにたいした違いは無いんだけどね」先程から、思考を読まれている気がする。刑事だつていつから、洞察力が高いんだろうか。

「刑事さんには、見えなかつたかい？」

そう言つて警官 桐嶋さんが苦笑する。俺は椅子に座つたまま、居心地が悪くて首を傾げた。俺が今いるのは、刑事ドラマなんかでよく見る、取調べ室のよつなところだった。本当の取調べ室がどんなだかは知らないが。

「……と、これが、森田の情報だ」

桐嶋さんが立ち並ぶ本棚から、比較的薄いファイルを取り出した。閉じられている紙の量もそんなに多くはない。

めぐると、そこには森田の顔写真がでかでかと印刷されていた。きつと、免許証か何かの写真なのだろう。俺が会つたときよりも幾分か若く見えた。相変わらず肌が青白かつたが、口元にはあの薄気味悪い笑みはなく、無表情だった。

「拓哉君、会つたのは本当にコイツかい？」

「ええ。一度会つたら忘れませんよ」

「そつか」

森田の顔写真をもう一度まじまじと見ると、下に書かれている文

章へと移る。

「『森田慎司。未婚。数年前に一度結婚しているが、すぐに離縁。実家に父、母、妹』か…」

一言一句、声に出して読んでみると、その下に興味深いことが記されていた。

「『故人。当時28歳。5月18日、某橋の上からの飛び降り自殺と見られる。雨で増水した川の水で溺れ、水死。下流まで流されたところを、釣りに来ていた中学生数名に発見される。』』

その下に、手書きで『楠木瑠佳（当時7歳）を刺し殺したとして

現在調査中。』

「桐嶋さん…」

俺が振り返ると、桐嶋さんの手の中から何かがゴト、と音を立てて落ちた。

お盆休みでほーっとしてたら「んなに・・・」めんなさい

森田慎司 【2】（前書き）

学校が始まってしまい、更新する時間が無い・・・。少しゆっくりめなペースで進めたいと思います。

「録音ですか」

俺は足元に落ちたそれを拾い上げる。落ちた衝撃で壊れていた。
「あ、いや…。念のためだよ。嫌だつたかい？」

「嫌じやないですよ。別に」

と言つて笑い、録音機を古い机の上に置く。置き方が悪かつたせいか、ぐらぐらと揺れた後、またしても床の上に落ちてしまった。俺は再び屈んで拾い上げ、笑みを浮かべたまま桐嶋さんに手渡す。

「俺が暴れて、うつかり何かを話すとでも思つたんですか？」

その言葉に、録音機を受け取ろうと手を伸ばしていた桐嶋さんの手がピクリと止まる。

「何も話しませんよ。…そもそも話すようなことなんかありませんし」

「…そんなつもりはないよ」

俺はその言葉に嘲るような笑みで返した。

「貴方が俺を見る目は、いつも変だつた」

哀れみのような、それでいて恐怖のような。この人はそれなりの歳で、いろんな事件にかかわってきた。だから俺のようになつた遺族をたくさん目にしてきたはずだ。

悲しみに暮れ、ただ呆然と犯人の逮捕を願う者もいれば、壊れたようには暴れる者もいただろう。

そして俺は後者。そのことを、この人は会つた瞬間からそれを分かつていた。

「見張るつもりだったんでしょう？」

「…」

「俺が、大それたことをしなじよつて」

きつと暴れた人たちは、何よりも犯人の死を望んだだろう。

いや、死よりも酷い結末を。犯人が死をもつて自分の犯した罪を償い、終わるような物語は望まない。そう簡単に、樂には死なせない。ズタズタに、それこそ身も心もズタズタにした拳銃生かす。何もかも奪い、奪われ、そして自らも闇の底へ墮していく。地獄の果てまでついていき、永遠に復讐を繰り返す。それが俺の理想。

「無駄ですよ」

目には目を。歯には歯を。なんて、甘い。片目を潰されたなら顔の全てを。歯を抜かれたなら体中の骨を。大切な人の命を奪われたのなら、大切な人の命を奪いつくす。

そこに犯罪という概念はない。ただ憎しみが動かす本能に従うだけ。

「見張つたって、無駄です」

桐嶋さんは俺の顔をちら、と見ると黙つて俺の手から録音機を受け取つた。そこに先程までの笑顔は無い。

「見張る、なんて一言も言つていないよ」

目の前に桐嶋さんが立つ。口調は相変わらず優しいのに、言い表せない威圧感がそこにはあつた。俺は気付かれないように唾を飲む。

「半分は当たつているけどね」

「半分？」

「『楠木拓哉を週に三日監視しろ』それが私の役目だよ。不本意ながら」

『見張る』じゃなくて『監視』。

「ははは。好きにしてくださいよ」

目の前にある厳つい顔に、自分の顔をぐつと近づける。

「俺は、逃げも隠れもしませんから」

この人が監視しているから何なんだ。関係ない。俺は、俺のしたい事をするだけ。

「君は、普段通り生活してもらつてかまわない。私も極力妨げにな

らないようにするか」

普段通り、ねえ……。

「それって、俺の家の中まで入ってくるんですか？」

「いや、さすがにそこまでは……」

「じゃあ、家の外から見張る……じゃない『監視』するんですね？」

「まあ、そうだ」

「困るんですよね。俺の家アパートだし、『近所さんとかもいるわけですし。アヤシイ人がうろついてたら、警察に通報されちゃいますよ?』

そう言って顔を放すと桐嶋さんは僅かにうろたえた。

「冗談ですよ。別に人通りの少ない小さなアパートですから。大丈夫です」

最寄り駅からも遠く、近くにコンビニもなく、たいした店もない。そんなところに住む奴なんかよほど金がないか変わり者か。

人居してる人なんてほんとにちょっとしかいませんから。と俺が

笑うと、桐嶋さんは眉間にしわを寄せた。

「私は、君が何を言つているのか分からない」

「俺が話してんのは日本語ですよ」

「君は先程『困る』と言つた。しかし今君は『大丈夫』と言つた

「別に、深い意味は無いですよ」

桐嶋さんはそうかといいながらも、眉間にしわを深くした。別に、どうだつていいんだ。近所のことななんか。

森田の情報を手にして、今まで俺の頭の中で練り上げてきた計画が一気に形作られる。森田相手ではできない所を取り除き、逆に新しく浮かんだものを更に練る。これなら、殺れる。心臓が高鳴つた。この計画なら森田を地獄に叩き落し、絶望させられる。そして、俺も……。

殺レル。

「復讐はやめておいたほうがいい」

俺の眼が憎しみと喜びに染まつたとき、計つたように隣から声が

「桐嶋さん？」

「やつと、後悔する」

その間で、お嬢ちゃんの髪は、またまた、同じく懸念が広がりました。

「復讐したって無意味だ。君はまだ誰も殺めていない。まだ間に合
そんないこと

第1回 おとぎの話

「あなたに、俺の気持ちが分かりますか？」

分かる」

悲しみが、喜び。喜びが、

また、俺の中で何かが暴れだした。制圧することができないアレ

が俺の感情を支配して暴れさせる……俺はそれは興奮した

「おひたは」

「あんたに俺の気持ちが分かってたまるか！！」

俺が掴みかかっても桐嶋さんは無表情を崩さないとほしながらた

たた落ち着けと言へばかり、その反應が俺の神經を遠なでる。

瑠佳の気持ちが分かるか…。瑠佳がどんな気持ちで死んでいった

八
ノ
レ
ト

空気を乾いた音が揺らした。同時に左頬に走る痛み。俺の体は地

面に転がつた。

「死んだ人間は何も語らない。何も思わない」

「つ……てめえ」

「死んだ人間に感情はない。瑠佳ちゃんは、悲しくも苦しくも寂しくも憎くも無いんだ。彼女は、死んでいるから」

俺は冷たい床に転がつたまま目の前に立つ男を睨みつける。なぜ俺は、この男に殴られたのだろう。

「死んだ死んだって……殺したのは森田だろ？！」

「そうだよ」

「瑠佳が……瑠佳がどんだけ苦しんで死んだと思つてんだよ……悲しくて、苦しくて、寂しくて……どんだけ憎いか……」

桐嶋さんは突然俺の胸倉を掴むとそのまま床に叩き付けた。

「それは瑠佳ちゃんの気持ちじゃない！！森田が憎くて憎くてたまらないのは拓哉君、君だろ？！？」

「つ……！」

「言つただろう？君の気持ちが分かるつて。君の、そのなんだ憎しみの感情が分かるつて！！」

背中に走る鈍い痛みと、動搖。

「私も……私も殺されたんだ！！君と同じ歳ぐらいのときに、大切な家族を……！」

「は……？」

俺は目の前の男性を凝視した。桐嶋さんは目から大粒の涙を流しながら顔を歪めていた。

温厚で、大人しそうな桐嶋さんの見せる激しい感情。癒えることの無い過去の傷。

「復讐しようとした！！いつまで経つてもモタついてる警察に嫌気が差して、自分で犯人を突き止めた。そして……」

桐嶋さんは目を見開いて、手で首を横に切るように動かす。

「殺してやろう。私はナイフで、犯人の腹を引き裂いた」

「桐嶋さんはその犯人を…？」

俺がそう問うと、桐嶋さんは首を振り困ったように微苦笑した。
「でもね。そのとき私の中に一瞬の迷いが生まれたんだ。人を殺めることに対する恐怖が。…結局犯人は大怪我を負ったものの、致命傷には至らなかつた」

「…」

「もちろん私は逮捕された。なんて馬鹿なことをしたんだと、自分を責めた。今度は人を救う立場になつて、犯人に復讐をしようと志し、一生懸命勉強した」

「そして、今の自分がいる。とでも言いたいんですか」

「違うよ」

桐嶋さんはいつの間にか俺から手を放し、冷たい床を食い入るようになつめていた。

「前科者は警察にはなれない。拓哉君、君が罪を犯し、そしてその罪を償う覚悟があつたとしてもだ。結果的に自分の人生を、掴めるはずの幸せを逃すことになる。君はまだ若い。若くして、大きなハンディを背負うことになる。…ちょっと、お喋りがすぎたかな」

「これから…？考えたことも無かつた。俺は幸せにはなれないのだろう。…いい。かまわない。幸せにならなくてもいい。瑠佳と過ごした四年で、俺はもう満足だ。」

「君と話していると、不思議なことに自分の過去が口から出でてくる。…それはきっと、人を救えるものだと思うよ」

「人を、救う？俺は幸せになりません。人は救えません」

意味が分からぬ、と笑う。

「でも、今の君じゃ無理だ。…人を憎むのは、辛い。そして多くの体力を使うから」

「…」

「この人は、憎しみを知つてゐる。どん底を知つてゐる。彼がそこからどうやって這い上がつたのか、なぜ刑事になることができたの

かはわからない。

そして俺は、この人と正反対。どん底へ墮ちていく途中。

「俺、帰ります」

復讐という道の先では地獄しか待っていない。地獄しか待っていないと知っている道を、人間は普通は歩かないだろう。

…俺は普通じゃない。大事なのは結果じゃなくて、その過程。たとえ結果が地獄としても、その道の途中で森田が苦しめばそれでいい。

「さよなら」

きっと次に会うときは、死体を挟んで会うのかもしれない。去りうとする俺を、ただ見つめる彼に、俺は微笑んで言つ。

「今日はありがとうございました。桐嶋さん」

おかげサマで、いい情ほうが、テニハイリマシたヨ…。

森田慎司 【2】（後書き）

勝手ながら、【1】で、少し設定を変更しました。

また、少し全話を改定しました。・・・が・になつてている程度なので気にしなくて大丈夫です

第四章 ヒトリメ【1】

「ヒトリメは、あんたに決めた」

「なん…っ」

目の前に噴き出す紅。そして悲鳴。一気に紅に染まって行く、両の手のひら。俺の頬に、体に、生温かいものが降り注いだ。体にのしかかる体重。俺はそれをおもいつきり吹き飛ばした。

「悪いのは、俺なんだ。あんたに罪は無い」

冷酷に言い放とった。でも、声が震えて言葉にならない。そのときになれば自分は冷酷になれるもの、そう信じていた。だって、もしもそのときに俺が冷酷になれないんだったら、人を殺めることなんか出来るわけがない。

でも、違つた…。もし俺がそんな人間だったら、ここに魂を失つた骸は転がつていなかう。

「勿論、フタリメはあんただよ…？」

震える声。

血に染まつた、獣の眼。獣の言葉に抑揚は無かつた。

+++++

『犯人は未だ捕まつておらず、逃走しているとみられ…。深夜の公園で二人の高校生が殺害され…。被害者は鋭利刃物で首や胸を刺され、またその後に腹部を強く踏みつけられ…』

休日の昼間。朝からずつと流れ続けるニュースを、俺はどこか人事のように聞き流していた。事件が起こつたのは昨日の晩。深夜の公園で女子高校生と男子高校生が殺された、というものだ。

彼らは首と胸をナイフで刺され、即死だつた。

『被害者は両者とも市内の高校に通う生徒で水崎祐太さん（18）

刈谷実沙希さん（17）…』

テレビの画面に二人の男女の顔が映し出される。よく見知つた顔だ。

水崎祐太と刈谷実沙希。

「どつかで聞いたことある名前だな」

どこでだ？と考えるまでもない。俺は自嘲氣味に笑つた。
殺されたのは俺と同じ高校に通う同学年の一人。面識は…ありす
ぎる。殺されたそいつらは俺の親友と幼馴染だから。

そういえば、今朝早くに警察が家に来たような気がする。『妹さ
んを失つた後に友人を失つてさぞ辛いだろ』『そう言つて頭を下げ
た。俺はただ漠然とそれをみて、そして涙が出るまで大笑いした。

滑稽だ。

警察は慌てて、犯人は必ずすぐに捕まえるから。と俺をなだめよ
うとした。もう耐えられないんだろう、と思つたに違ひない。そう、
耐えられない。…面白すぎて。

お前らが話しかけているのがその犯人なんだぞ？必ず捕まえる、
と言つてゐる犯人が目の前にいるそいつなんだぞ？早く捕まえろ。
結局俺は、警察が困り果てて帰るまで笑い続けた。きっと諦めた
んだと思う。唯一の家族を失つて壊れたところに、数少ない友人を
失つて、もう粉々に碎け散つてしまつたと思ったのだろう。

滑稽だ。

目の前に犯人がいるのに。部屋に行けば真っ赤なTシャツがある
のに。台所へ行けば血まみれのナイフがあるのに。

滑稽を通り越して哀れにすら思える。

ひとしきり笑つた後、俺はナイフとそのときに着ていた服を処分

した。一人分の血が染みた服は重く、気分が悪くなるほどの悪臭がした。

目撃証言は無かつたらしい。もし見られていたとしても、暗くて服の色まで分からぬだろうし、第一古い帽子を深く被っていたから顔立ちも分からぬだろう。

……ではつきりしておいつ。

祐太と実沙希が殺された。そして殺したのは俺だ。水崎祐太と刈谷実沙希を殺したのは、楠木拓哉だ。

+

++++

不意に辺りは闇に包まれる。微かに注ぐ月明かりで、俺の体が照らし出された。

そうか、悲鳴が聞こえないのか…。ようやく死んだのか。俺はそつと、足元にころがるそれからナイフを引き抜く。「ポ、と音を立ててまた血が流れ出た。

俺の頬を、血ではない何かが流れる。巻きこんでしまって申し訳ないという気持ちと、これでいいんだというどこか諦めたような感情がないませになつて零れおちる。

それが転がる死体の体に落ち、軽やかな雫となつて跳ねる。いくつもいくつも。

傷つけてごめん。苦しめてごめん。奪つてごめん。でも、じゃあ他に俺は、どうしたらいい…？

違う。この体はもう生きていない。生きていないから、俺の親友なんかじゃない。この死体はさつきまでは俺の親友だった。でも心臓にナイフを突き立てられたことによつて、親友の『水崎祐太』ではなく、『水崎祐太の死体』になつたんだ。

だからコレは祐太じゃない。もう、タダの屍。タダの肉の塊。そこに祐太はない。

だから俺はこいつを踏みつけても何も思わない。ぐしゃり、という肉の音が響いた。

「…た…くや？」

背後から聞こえるか細い声。

「なんてことして…」

「祐太には、死んでもらつた」

ひつ、という押し殺した悲鳴。

「…時がきたら罪も償う」

「どうして…。どうして祐太を…？」

「ヒトリメに、一番相応しい」

大切な人が奪われれば、迷いも消える。俺が人殺しになれば祐太や実沙希は俺を止めようとするだろう。やめられない。だから、傷つける。そこで森田に奪われてしまったら、きっと平常心を保つていられない。

奪われるのが怖かつた。だから、殺した。人に奪われるぐらいなら、俺が奪う。

失うものは何も無い。もう何も護らなくていい。護られなくていい。もう何も怖いものはない。

「勿論、フタリメはあんただよ」

怖がる実沙希に俺は詰め寄る。乾ききらない紅い血が付いた、ナイフを持ち上げる。

「いやつ…！」

「実沙希…ごめん。祐太にも、伝えてくれ」

実沙希の細くて柔らかい首に、埋もれる無機質な刃物。噴出す紅生温かい液体が腕を伝う。実沙希が最後の力で俺の腕に縋つた。

「た…くや…。たく…。たく…ちゃん…」

「みさ…」

ふつと力の抜ける手。離れていくぬくもり。

ドサ、と実沙希の体が地面へ落ちる。やけにゆっくりと。たつた数秒の出来事なのに、俺にはそれが永遠に感じられた。死んだ。俺が殺した。

「なんで、こんなにあつけなく死んじまうんだよ……。お前らも、

瑠佳も…」

田の前に転がる二つの人型。そつと触れると、瑠佳に触れた時と同じように冷たく冷え切っていた。

大切に想う人がいると、それは人の弱みになる。もしもその人を人質に捕らえられたらどうだ。その人を盾に脅されたらどうだ。こつちは手も足も出なくなる。

だからいいんだ。殺したつて。

俺はさつきまで『刈谷実沙希』だったモノを踏みつけた。これは『刈谷実沙希の死体』であつて『刈谷実沙希』本人じゃない。

だからいいんだ。踏みつけたつて。

深夜の公園に、ただただ不気味な音だけが響いていた。

「たーくーちゃんー。あーそーぱつーー。」

キャツキャツとはしゃぎながら公園の反対側から女の子が走つてくる。スカートがふわふわと揺れ、愛らしい。

「そんなに急ぐと、じる…あつ」

言つているそばから実沙希が派手に転ぶ。拓哉は実沙希のそばに駆け寄つた。

「だいじょ「づ」ぶ？」

「だいじょー「づ」！」

そう言つて笑う実沙希の頬に、涙の筋がいくつもあることに拓哉は気づいた。

よく見ると、実沙希の服は泥や土で汚れている。

「みーちゃん、変な子ーーー。」

「もうあそばなーいーーー。」

「あそばなーいーーー。」

そのとき、遠くの方でほかの子供たちが何か言つていた。拓哉のみたことのない子たちだ。

実沙希はチラとそちらのほうを回くと、黙つたまま唇を噛む。

「どうしたの？」

「みんな…意地悪するの…たくちゃんは意地悪しないよね？」

声を震わせ、今にも涙が零れおちそうなくらいに田に涙をためて。

「おれは、意地悪しないよ。みーを守つてあげる」

「ほんとうーー？」

「ほんとうだよ」

「うれしいっ」

拓哉はそつと実沙希の服についた泥を払つてやつた。

それから実沙希は、毎日のよつに拓哉と遊ぶよつになつた。拓哉

の近くにいれば、拓哉が怖いのか誰も実沙希をいじめたりなんかはないし、拓哉も別に嫌いやなかつた。

ある日。拓哉が久しぶりにちょっとかいを出してきた悪ガキを追い払うと、実沙希が唐突に言った。

「みーね、おおきくなつたらたくちやんのお嫁さんになるーー。」

「おれのお姫さん」

卷之三

実沙希がうれしそうに跳ねた。

卷之二

実沙希が自分の小指を差し出す。拓哉は一瞬戸惑い、そして自分も小指を差し出した。

一九一九年五月

+

そしていつからだつたか、実沙希の呼び方が『たくちゃん』から『拓哉』に変わつた時、拓哉の呼び名が『みー』から『実沙希』変わつた時、その約束は自然となくなつた。いや、忘れてしまつただけかもしない。

小学校に上がるまでは仲良しだった。いつからか拓哉と実沙希は互いを意識して、普通に仲は良かつたが、一緒に遊ぶということはなくなつていつた。

実沙希の手が拓哉の腕から落ちた時、拓哉はあの約束を思い出して、いた。いまさら思い出したつて仕方のない、ただ苦しいだけの約束を。

「『めんな。…みー』

サラサラと流れる長い髪が、しばらくの間拓哉の腕に留まっていた。腕の隙間から零れ落ちていく命の欠片。

微かに聞こえたささやき声。きっと、拓哉自身も気づいていないだろう。

まだ死にたくない。やつは足搔ぐのに、心はすつきりとしていた。もう言葉を発することもかなわない。動けない。

『自分が生きてたって、大切な人が幸せじゃなかつたら生きてる意味がない』

だからもういい。納得なんかできないけど、これで少しでも拓哉の気持ちが楽になるなら。未練が無いつて言つたら嘘になる。これから先、もっとたくさんのことが待っていたはずなのに、実沙希の人生は闇ざされる。そんな理不尽な…。でも、叫びの変わりに出てきたのは別の言葉だった。

「…………たく…ちゃん」

裂かれたはずの声帯を使って、動かないはずの腕を動かして。

濃密な闇に、意識が溶けて行く……。

番外編 おさななじみ（後書き）

今日はちょっと短めです。
普段も十分短いですが…。

俺は何をするでもなく、ただぶらぶらと歩いていた。川に面したこの辺りは人通りが少なく、たまに見かけても犬か猫だ。

「あ……楠木さん！ 楠木さんですよね？」

パタパタと足音を響かせながら一人の可憐な女性が駆け寄つてきた。ふわりと空気を含んだように柔らかそうなワンピースを着て、なにやら大きな箱を大切そうに抱えている。

「茜さん」

俺は足を止め、彼女 茜さんが追いつくのを待つた。

程なくして隣についた茜さんは肩で大きく息をし、とびっきりの笑顔を俺に向ける。

「そんなに急がなくたって
、俺は逃げませよ」

「なんだか早く追いつきたくなつてしまつて。それより田曜日、いらっしゃらなかつたようですが、どうかしましたか？ 子供達が寂しがつてました」

俺は毎週日曜にしらゆり園に行き、子供達と遊んでやつていた。他にすることも無いからだが。

「いや……急用が入つてしまつて」

「そうでしたか」

納得してうんうんと頷く茜さんを見ると、俺の胸の奥がちくつと痛んだ。

その日は、とても人前を歩ける状態じゃなかつた。ましてや子供達と遊ぶなんて、無理だつた。

「ふふ。本当は、子供達よりも私のほうが寂しかつたんですよ」

「へ？」

「何でもありません。独り言です」

唐突に言われた一言に俺が戸惑つていると、茜さんは笑つて付け加えた。

「そうだ。今から時間あります？」

「はい。暇です」

「よかつた。しらゆり園までもきませんか？おいしいケーキを買つたんです」

なるほど、その大きな箱はケーキだったのか。道理で甘い匂いがする。

「喜んで行かせてもらいます」

「本当ですか！！」

笑顔がぱつと輝き、まるで花でも咲いたみたいだ。自然と俺の頬も緩み心が温かくなる。同時になぜか胸が痛んだ。

+++++

「やつたあ！ 茜ちゃん、ありがとう！」

「ありがとおー！」

茜さんは微笑み、子ども達の頭を順番に撫でる。

「ちゃんと、手を洗つてから食べるんだよ？」

「はあーーい」

元気な足音が隣を駆けていった。

「楠木さん。どうぞ？」

「あつ。いや、俺はいいんです。すぐ帰らなくちゃいけないんで「家中に入るよつ勧められたが、俺は首を振つた。

「そうですか…」

残念そうな声が聞こえる。

…。なんだかいやに胸が苦しい。鉛でも沈められたかのように胸が冷たく沈み、先程までの高揚感はまるでない。

子供は正直だ。俺の変化を敏感に察知し、自分の身を守るため、

無意識に俺を避ける。

「どうか、しましたか？」

「…なんでもないんです」

俺が俯いて言うと、茜さんは眉根を寄せた。

「なんでもなくありません！！」

まるで子供を諭すような口調に、俺は驚いて頭をあげる。

茜さんはしめた、とニヤリと笑い、ケーキの中に入っていたのだろう保冷剤を俺の頬に当てた。ひやりとした感覚に仰け反る。

「ちょ…冷たい！！」

「元気出ましたか？…会つたときから、ずっと元気がないようだったので」

いつもの、あの悪戯っぽい笑いを見せられて、俺はたじろぐ。

「そういう風に見えました？」

「ええ。見えました」

「そ…そうですか…」

できるだけいつも通りに振舞おうとしても、やはり影ができてしまう。子供にはそれがわかつたのだろう。

「苦しいですか？」

「え？」

「なんだかずっと、何かに耐えてじるような顔をしていたので」
それは…と思わず口ごもると、茜さんは一瞬寂しそうな顔をし、
そしてまた笑顔を見せた。

「私の前では無理しなくていいです。…私が出来る」となら、なんでも言つてください

俺の中でなにかが、ストンと落ちたような気がする。

「…その顔です。なにも考えていない楠木さんも素敵です」

「拓哉」

たじろぐのは茜さんの番だった。何も考へていないので、まるで誰かに操られてこいるかのように口から言葉が出てくる。

「拓哉って、呼んでください」

「た…拓哉？」

…。沈黙があった。

俺と茜さんは互いに目を見合させ、そして互いに真っ赤になった。
「い…いまのはその…俺の考へで俺の考へじやないって言つたか…俺の言葉じやないっていうか…。だからその、別に言わなくてもいいつていうか…」

なんでこんなことしか言えなんだ。と俺は自分で自分を殴りたくなる。

茜さんはと黙り、ただ黙つてうつうつと頷く。顔は耳まで夕陽の様に真つ赤だ。

俺は沈黙に耐えられなくなつて、気になつたことを聞いた。

「あ、茜さんはその、どうしてここで働いているんですか？」

第五章 ケモノ【1】（後書き）

今日は少し短めです。

次話も短めになる予定です……

ケモノ【2】

「実は…」

そう言って声のトーンを落とす。聞いてはいけなかつただろうか。
「私、恥ずかしながら医者になりたくて…」

「医者?」

医者、というよりも、それとここにいることどうの関係があるのか疑問だ。

「呆れますよね。冗談だと思うかもしませんが、本気だったんです。誰かを助けたくて…。助けるつていつたら、お医者さん、つてしか思いつかなかつたから。ただ漠然と、『医者になつて誰かを助けるんだ』って勝手に意気込んで。今考えると、本当に馬鹿だつたなあつて」

「…俺は、馬鹿だとは思いません」

「ふふ。ありがとうございます。でも…落ちたんです。夢と現実は違つ過ぎた。結局受けたのは、医者になんかなれっこない、三流大学だけで」

「え?」

「私には時間が無かつた。私は、幼いころに母を亡くして、男手一つで育てられてきました。でも、そんな父が病氣で。その病氣を治すことはできなくとも、一人でもやつていけるつて、父を安心させたかつたんです」

俺はなんと言つたらいいのか分からなくて、目を泳がせた。

「焦つて、焦つて、焦つて。一生懸命勉強しても、思い描いたものには到底及ばなくて。絶望して、そんな自分が嫌で嫌で…そんなときに出会つたのが、ここにいる子供たちなんです」

茜さんは目を細めると、子供たちへ微笑みかけた。優しい、自愛に満ちたまるで母親のような微笑みを。

「こここの子達は辛い境遇なのに常に笑つていて。私はその笑顔に救われたんです。そして教えられた。人の微笑みは、こんなふうに人

を救えるんだって。医者にならなくても、助けることはできるんだって。私は実家に帰つて、家族と共に父の最期を看取りました。父の顔は穏やかで…。父を最後に、『助けられた』かなつて。だから私がここにいるのは、私を助けてくれたこの子達を、今度は私が『手助け』したいと思つて…

そう言つて笑う茜さんの目に、涙も後悔も無かつた。あるのは深い悲しみだけ。それは、父を失つたという悲しみとはまた違つ氣がした。

「人間つて、どうしてこんなに不完全なんでしょう…」

「不完全、ですか？」

俺は混乱した。完全な人間なんていない。と、よく言ひ。俺もう思うし、だから茜さんの言葉が理解できなかつた。

「人は、その在り方一つで人の心や人生を救えるんです。私も、もつと早くに気づければよかつた。こんなに小さな子だつて、人を救うことはできます。それなのに、どうして人の命を奪うことしかできない人がいるんでしょう」

「…」

「その人が憎くい気持ちは分かるけど、それをその人に返しても何にもならない…。ただ憎しみが増えていくだけで、悲しむ人が増えるだけで、自分に何もプラスにならないと思うんです」

胸が締め付けられる思いだつた。でも、俺に何ができるだろう。守るものはどうに失つた。誰かを憎まずにはいられない…。

「茜さんは…」

「はい？」

「茜さんは、そんな人達を、怖いと思いますか…？変だと思いますか…？」

茜さんは遠くを見つめ、少し考えたあと首を横に振つた。

「きっと、那人達は今、すごく苦しいと思うんです。辛いと思うんです。でも私達が怖がつて、手を差し伸べてあげなかつたら、救

えるものも救えない。私は、そんな人達を助けられる人になりたい。

「ふふ。なんて、そんな簡単なことじゃ。」

「茜さんなら…きっと…できます」

「はい?」

「茜さんなら…」

今だつて俺の心を救おうとしてくれている。俺の頬を涙が伝った。嬉しかった。俺を救つてくれようとしてくれる人が、こんなに近くにいたなんて。

「『ごめんなさい。私、なにか悪いことでも…』

「違うんです。なんでも無いんです」

もう少し早く気づいていたら。そうしたら、手遅れにならずに済んだのに。

俺は初めて後悔した。そして森田ではなく、自分が、自分の運命が憎いと思つた。

もしもあの時、森田が殺したのが瑠佳じやなかつたら。

もしもあの時、母さんが出て行かなければ。父さんが死ななければ。

もしもあの時、森田に出会わなければ。

もしもあの時、ああしていれば…。

でも俺は、人を殺めてしまった。茜さんがいくら光を差し出してくれても、俺にそれを受け取る資格は無い。この汚れた手で、何も守ることはできない。

俺にできるのは復讐を成功させて、そして罪を償うことだけ。光に手を伸ばすには、もう『手遅れ』だから

俺は目元に光るものを拭い、茜さんに一礼して駆け出した。決心

が揺らがぬうちに。

風が、頬を撫でる

「つはあ……。ど……つして、こんな……」と……。あ……。あなたの……
目的はつ……なこ……？」

「目的？……俺はあいつが苦しめば、それでいいんだ
「こた……えに、なつてない……」

「黙れ」

俺は女の頬を叩き、縛り上げた腕をさらに強くひねった。

「いつ……やめて……」

女は床に這い蹲り、涙や何やらべしゃべしゃになりながら懇願する。

「もう……やめてよ……。私が、何をしたっていつの」

「お前は何もしちゃいない。したのは……お前の兄貴だ」

「」の女は、あいつの実の妹。はたしてあの男がこの程度で苦しむかどうかは定かではないが、この際どうだつていい。

俺はまた、女の肌に手を這わせる。白い肌は柔らかく、手のひらに吸い付くようだ。

「い……や……。やめて！……こやあ……」

女は悲鳴を上げ、俺の足に縋つづく。

「お願ひ……もうこれ以上……」

「黙れ」

「いやつ」

女が顔を上げた。絶望に歪んだその顔はとても美しいとは言い難く、しかしその濡れた瞳だけは反抗的に細められている。

「まだ、気が狂つてはいないようだな」

気が狂つていなことが、果たしていいことなのか。ここから先是狂つていたほうが楽かもしれない。

俺は女と同じように目を細め、手中に光る鋭利な刃物を握りなお

した。

+++++

…。
…。

「ふう…」

俺は浅く溜め息をつき、いまだに夏の暖かさを宿す太陽 いや、太陽の浮かぶ空を見つめた。太陽光とは逆に、凍えるよつに冷たい秋風が俺の髪を撫でる。

「次の獲物は…」

無意識に呟くと、自分の意思とは反対に口元が歪む。歪んだ口元とは逆に、冷めたように光を宿さない眼。

そして吹き抜ける風。まるで、俺の胸に開いた穴を吹き抜けていく。

「いいや…。全部、殺してやる
森田の関係者は、片つ端から殺してやる。

「憎め。俺を憎めよ。憎んで苦しめ。苦しめば、樂にしてやるから」
俺はポケットに手を突っ込み、中にあるものを確認する。生温かい液体に包まれた、冷たいそれ。耳にこびり付く悲鳴を思い出し俺はつづりと眼を閉じた。

+++++

「どうやら様…！？」

「叫ぶなよ。じつとしてろ」

「それ…その…」

「大丈夫だ。あの世で娘が待つていてる。息子もすぐ逝くから」

「むす……つー……」

「……苦しまないよう」「一発で殺してやつた。感謝しき」

力チ、力チ、力チ。

時計の音は、休まずに聞こえ。

+++++

「うう……」

吐き気がこみ上げ思わずその場にうずくまつたが、ここしばらく何も口にしていないことに気づく。吐くものがなれば吐けない。俺は諦めて立ち上がった。

じやり。

足元の砂が音を立てる。

日はもうとっくに沈み、辺りを月明かりと儚げな街灯が照らしていた。

「まるで……ケモノだな……」

俺は、ケモノだ。

森田の母親を殺し、罪を『犯した』。森田の妹を『犯した』。

森田のことを考えると胸の奥が痛むよつと泣き、森田の妹である女のことを考えると下半身が疼く。

人を殺したくて仕方がない。犯したくて仕方がない。
こんなのが、人間のはずはない。

だから、俺はケモノなんだ。

だから、情というものを知らないんだ。

ケモノ【3】(後書き)

遅くなつて申し訳ありません……

この調子が悪いので、更新の頻度が遅くなります……。

第六章 生きる価値 【1】

街の喧噪が痛いほど俺の耳朵を叩く。多すぎる人ごみに呑まれ、しかしそれでも自分は孤立しているように感じた。

流れに逆らわず、ただ流されるように歩く。体が酷くだるく、動くのも抗うのも億劫だった。

「…」

体が火照る。いやに意識が朦朧とし、足元もおぼつかない。そういえば、どうやってこの人の多いところまできたのか、全く覚えていない。

胸が痛む。

胸の奥のほうが針でも刺したように微かに、けれども確かに痛む。そこは、かつて自ら命を絶とうとした場所に近かった。

俺は小さく呻いた。その呻き声が周りに聞こえるはずもなく、世間はいつもどおりに騒がしく、けれども穏やかに過ぎていく。なぜだろう。ここにいる人々はみな活気に溢れ、自分とは違う世界を生きている気がした。

まさかここに、人を何人も殺した殺人鬼がいるとは夢にも思わないだろう。

「いい…」

捕まつたつていい。死刑にされたつていい。罵られ、死よりも酷い仕打ちをされたつていい。

死刑にして欲しい。死よりも酷い仕打ちをして欲しい。殺して

欲しい。

何度も自分の中で繰り返してきた言葉。

憎い。口セ。

森田を殺すまでは死んでも死に切れない。もはや俺は『瑠佳を殺した犯人』を憎むのではなく、森田慎司そのものを憎んでいた。森田のあの蛇のように細められた目を思い出すと、吐き氣と悪寒が込み上げる。

不快な笑い声が耳の奥を引っかく。一瞬は森田の笑い声にも聞こえたがよくよく落ち着いて聞いてみると、それは俺の笑う声だった。

通りがかる通行人が気味悪そうに俺を見た。俺はその通行人の一人を見るとにたりと口を歪ませ、すっと手を伸ばす。人々は恐怖に顔を歪ませ悲鳴を上げて逃げ去つていった。

肩に衝撃が走る。後ろに強く引っ張られ俺はよろめいて振り返る。そこには真面目そうな男が突っ立つていた。二十代後半。きつちりした格好はしているが、警察関係者ではないようだ。

「君、彼女に謝れ。一体何のつもりだ」

「ははは…」

「ふざけているのか？ 警察を呼ぶぞ！」

「けーさつう？」

焦点が定まらない。それがかえって不気味に見えたらしく、男は微かに一步さがつた。

「話が通じないようなら、体に教えてやるしかないだろ？」

男はふつ、と体に力を込めるど、俺に向かって拳を振りかざす。

俺はその拳を左手で樂々と受け止め、男の腹に拳を叩き込む。続けて右頬、左頬と休まず殴つた。硬い感覚がして一瞬手を止めると男の折れた歯が血と唾液を纏つて地面に転がつていた。

自分の体のどこにこれだけの力があつたのだろう。殴つてこるう

ちに苛立ちがこみ上げ、更に力を込めた。

次に気がついたときには俺は三人の男に地面に組み伏せられた。戸惑いが生まれ、男の一人を殴りかけていた腕が止まる。自分の体が無意識のうちに抵抗していたことを知った。

動きが止まつたところを取り押さえられ、わけが分からないうちに手足を拘束された。俺はうな垂れ、それを諦めたと思ったのか三人の男 三人の警官はふつと力を抜いた。今なら逃げられるかもしれないが体が動かない。

俺はされるがままにひっぱられ、途中で氣を失つたのか気づいたときには狭い部屋の中にいた。

部屋の中は薄暗く俺は椅子に座つてゐるようだ。俺の前に人がいる気配がする。視界がぼやけてよく見えないが、それはどこかで見た顔だった。

「桐嶋さん…？」

俺は目の前の人物が信じられて、一、二、三度目を瞬く。しかし霞は大きくなるばかりで次第に吐き気が込み上げてきた。

「俺…ここ、どこですか？ 俺、一体何を…」

ここは警察署で、君は人を殴つたんだよ。という桐嶋さんの声が遠くに聞こえた。耳鳴りがする。

「自分のしたことは、覚えているんだよね？」

「…はい」

「ならよかつた。なんで、殴つた？」

「分かりません」

俺が聞き取りやすいようにゆづくつといつてゐるのが見て取れる。その後に繰り返された質問に、俺は頷くが分からぬといつしかなかつた。

「まいつたな」

桐嶋さんはお手上げだといわんばかりに手を頭の後ろで組んだ。

「君も自分がどうなったか理解していな」「うだから、少し話をしようか」

「話…？」

「君はここに連れてこられるまでに何度も気を失った。きっと精神的な面が関係しているんだと思う」

心と体は比例する、と桐嶋さんは続ける。

「かけがえのない家族を失い、盟友を失つた。一人残された自分が憎いんじゃない？」

「…」

一つだけ違う。自分が憎いのはそうだ。森田が憎いのと同じぐらい自分が憎い。ただ、実沙希と祐太を殺したのは俺だ。その罪悪感で、自分が憎い。

「しばらぐの間はここで生活をしてもいいことになるかな。だからその間に、心を落ち着つけて欲しい」

「俺、少年院に入るんですか」

「それは…」

「言ってください」

「…入らない。といえば嘘になる。でも今のところは君の精神状態が不安定だから、ある程度安定するまでは保留としているよ」

「嫌です」

そんな悠長なことをしていたら、森田がどう動くか分からない。

「嫌です。そんな、森田が…」

「これは、君がこれから前向きに生きていくために必要な期間なんだ」

「いやだ…」

俺なんかに、前向きに生きていく資格なんて無い。生きる資格なんて無い。

「俺は…死ぬんです」

森田を殺して、自分も死ぬ。それで全てが丸く収まって、万々歳だ。

「だから…生きないんです。も'つ死ぬんです」

「生きなさい」

「嫌だ…」

子供のように嫌だとダダをこね、震える手を押さえる。

「生きて、罪を償いなさい」

「嫌だ…！」

「君の罪は現実を見ることをやめたことだ。君の罪は、死だけでは償えないほど拡大している」

「俺には生きる資格なんて無い！！」

「死んで楽になりたい？でも、罪を償わないまま死んでもらうわけにはいかないんだよ。実沙希さんのためにも、祐太君のためにも」

俺ははっと顔を上げた。この人は、きっと初めから知っていた。「ずるいと思わない？罪も償わないで、自分だけ楽になろううついうのか？」一人に合わせる顔がないだろ？

「つるさい…」

「ごめんなさい。でも、いいんです。俺は目をカツと見開くと、無防備な桐嶋さんの首に飛び掛った。

遅れてしまつて本当にすみません!

生きる価値【2】

桐嶋さんを押し倒し首を掴んで床に押し付けた。

はずだった。

「つぐ…」

それなのに俺は今冷たい床に頬を付け、自分の体に馬乗りになる男を見上げていた。圧倒的に不利だ。俺は、すっと桐嶋さんを睨みつけた。それはまるで、痛みを堪えているかのような、苦しげな顔。

「…してくれ…放してくれ…つ

俺のほうが不利なはずなのに。

そう叫び声を上げたのは俺ではなかった。

「桐嶋さん？」

気づけば彼の腕からは力が抜け、体までもがだらしなく床に崩れていいくところだった。彼は本当に痛みに耐えていたんだ。

無意識。本当に無意識だった。俺の手が無意識に掴んでいた温かく、太く、そして僅かに動くモノ。俺がそれを更に強く握り締める、握り締められた桐嶋さんは呻き声をあげ、自分の首へと手を伸ばした。自分の首を絞め続ける俺の手に縋るよ。

「私が…何をした…」

「なにもしていません」

「だつたら、何故…ぐ…」

「それは…」

俺の邪魔をするから。俺を救おうと手を伸ばしていくから。

だから、憎イ。だから、コロス…。

「俺は貴方のようにはなれません。…瑠佳の無念を晴らせないのなら、生きる価値なんかありませんから」

「瑠佳…ちゃんは、大好きなおにいちゃんが…自分のために狂うことを望んでいた…だろうか

『瑠佳…？ 望む…？

『瑠佳は、優しい子だな』

『えへへ。…おにいちゃん、肩車して？』

『いいぞ。ひゃんと捕まつてみよ？』

『やつたあ！ たかーい！ お兄ちやん大好きー。』

『あはは。よかつたな』

俺はいつも、瑠佳の幸せだけを願つてきた。ずっと、ずっと。瑠佳が生まれる前から。

じゃあ、この穢れた手を、あの子はどう扱ひだらうか。嫌うだらうか。避けるだらうか。

『お兄ちやん、大好き』

こいつもの考えが俺の頭の中を駆け巡り、結局は。

『お兄ちやん』

可愛い、瑠佳の声。

『オニイチヤン』

醜い、獣の声。

『お兄ちやん』

違う。

『オニイチヤン』

俺には、こいつちでいい。獣でいい。

だつて 。

「死んじやつたじや……ないか……」

瑠佳ハ、死ンダ。アノ子ハモウ、戻ツテコナイ。

可愛イ妹ハ、殺サレタンダ。

考エタツテムダ。瑠佳ハ死ンダ。コノ男モ、自分が助カリタイダ
ケ。瑠佳ノ死ヲ、利用シタ。

死ネババイ。

ミンナ、死ネババイ。

「た……くや君……？」

ミンナ、死ネバ……。

「お前はどうせ自分が助かりたいだけだろ？ 瑠佳の話を出せば、

俺が揺らぐと思って……！」

俺の双眸から、雫が零れ落ちた。

無抵抗な桐嶋さんの首を絞める。ありつたけの、力をこめて。
涙が、溢れ出す……。

「そんなの、もう効かねえよ。だつて瑠佳は死んだじゃねえか」

俺の手を自分の首から引き離そうとする力が、弱くなる。ぐんわりと曇つた目が俺を見つめていた。そんな目で、俺を見るな。

「ひひひひ…はははは」

きつと今俺は、酷い顔をしているだろう。泣きながら笑い、憎み、悲しみ、喜び、愛する。全ての感情が渦巻く。俺という壊れたナニ力を中心にして。

桐嶋さんの体が重くのしかかる。

「死んだ」

今コノ男を絞め殺した。

俺は体に重くのしかかる桐嶋さんの屍…。いや、ただの肉のカタマリを押しのけた。これはもう、ただの肉のカタマリ。ただの抜け殻。実沙希のときも祐太のときも同じだった。

サツキマヂ人間ダツタケド、モウ違ウ。

憎しみという感情にとりつかれた俺と、この名の悪魔は、目の前の肉のカタマリを踏みつけた。柔らかく、ほんのりと温かさが残つている。

「死ねえ…！」

ぐしゃ…。やけに生々しい音が、俺の足元から聞こえる。なんだか足が濡れている気がする。おかしいな。雨なんか降つてなかつたし、そもそも室内に水溜りなんかできるわけないんだけどな。

「ああ…そりいえばもう死んでいた。死ねつていっても意味無いかあ…」

生臭い、血ノニオイ。吐き気をもよおしそうなその匂いに、俺は酔いした。

「お家の中に水溜りはできないけど、血溜まつだつたできるよねえ？」

「だから足が濡れてる。じゃあこの匂いは……？」

「芳香剤かな。いい趣味してるねえ」

「ぐちやぐちやにしてやるよ。何もかも。原型も残さないほどいい。骨を碎いて内臓を引っ張り出して、代わりに憎しみを詰めてやるよ……。人間の本当の姿に戻してやる。奇怪で、不気味で、おれましこ。」

「そうしたらほら、多分誰もわかんないだろ?」

「悪魔がちょっと中身をかじつたなんて。」

拓哉君、キャラ崩壊。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5945v/>

復讐 ツミヲツグナエ

2011年11月24日16時56分発行